WASON
HQ
1104
J77+
n.i-3
1888
no. 134

The Woman's Magazine.

女學雜誌

一冊五錢

版權所有

當府内無郵税

各土曜日出版

明治廿一年（第百參拾四號）十一月三日發

社説
舞踏の復活○將來の和歌
論説
日本婦人の洋服（其二）（渡邊照）
批評
情○都の花○山田美妙大人の小説（其二）○人工早產の實驗○娼妓公許の利害得失
叢話
婦人衛生一斑（其三）（櫻井郁二郎）○子供の養育（其二）○栗と柿○一唱百歎○男女交際論に於ける女學雜誌○邪推と流言○神、家、仁愛
小説
さすがに双紙○哲女の巻
佳傳
寄書
新報
外報
小供談

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
C77+

Nov 3
1888
No. 134

一冊五錢　　版權所有

當府内無郵税　　各土曜日出版

明治廿一年（第百參拾四號）十一月三日發

社説

舞踏の復活○將來の和歌

論説

日本婦人の洋服（其二）（渡邊鼎）

批評

情○都の花○山田美妙大人の小説（其二）○人工早産の實驗○娼妓公許の利害得失

叢話

婦人衛生一斑（其三）（櫻井郁二郎）○子供の養育（其二）○栗と柿○一唱百歎○男女交際論に於ける女學雜誌○邪推と流言○神、家、仁愛

小説

さすがに双紙○哲女の巻

佳傳
寄書
新報
外報
小供談

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

No. 134. NOVEMBER 3RD, 1888.

EDITORIAL:— "Revival of Dancing." "Future Poetry of Japan."
LEADING ARTICLES:— Japanese Ladies in Foreign Costume, by Dr. K. Watanabe.
CRITICAL NOTES:—"The New Magazine." "The Flower of the Capital." "Mr Yamada's Novels" "Forcing Growth by Artificial Means." "On Licensed Prostitution."
MISCELLANIES:—"Hygiene for Woman" "Children's Education (Clara Whitney Kaji)." "Chesnut and Persimmon." "Jogakuzasshi's Opinion in respect to the Question of Social Intercourse." "God, Home and Love." "Conjectures and Rumors."
NOVELS:— "Sasugani." "Tetsujo no Maki." (VII).
BIOGRAPHIES:— Frances E. Willard.
CRRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

通信女學 第拾四巻 發兌

蓋し最良の教科書

婦人會員の會話及び内の病學に適せり

十月廿六日出版せり

一冊紙數七十頁
定價廿錢全國無郵税

●珊瑚の珠　（第八十四回）

交際の道こゝろひあるへき事

權貴の家と女おほき家に數々出入すべからずあるじ留守の家ながゐすべからず主人欠伸せばはやく立べし人來りて問ふ事ありとも志他にあらば詳かに說べからず吾が好事なりとも人このまざるとをば語べからず朋友にも深切の異見再三よして可かずんば止むべし我なすべしと思ひ立たる事は明日ありと思ふべからず貧しき人は疎みやすく富貴の人は親みたきものと知べし金銀にのぞみては爭心起るものとしるべし。（梅園叢書）

御白河法皇の女房右衞門佐の事

宗家の大納言とて神樂催馬樂うたひてやさしく神さびたる人おはしき北の方は御白河法皇の女房右衞門佐と申ける宗經の中將をうみなどして後かれ〳〵にありて遠ざかり給ひけるに逢とのたへば命の絕なんと思ひしかどもあられける身をとよみてやられたりけれは返事はなくて車をつかはしむかへ取てまたとし比にありけるもやさしくこそ。（古今著聞集）

たつた川のほとりにてよめる　　坂上是則

もみちはのなかれさりせは立田川みつのあきをはたれかしらまし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百三十四號　明治二十一年十一月三日發兌

社説

○舞踏復活（上）

謹んで承はるに、我が　英聖文武なる　日本國皇帝陛下は、平素殊の外に舞踏なる者を厭はせられて、過般すでに某々等に其の御思召を告げさせ玉へる事の候由、何如にしけん民一般の傳聞し奉る所ろとあり、府内府外にある全國數十の新聞紙は皆な此の御美德を記し奉るの榮を得たるのみか、西洋各國の新聞雜誌は亦之より轉載して、近時舶來する所のものに至る迄尚ほあり〳〵と其譯文の存するを見る也。然るのみならず、一時鹿鳴館に櫻花の如く爛熳としたりける、舞樂會とか申す常例の舞踏會に於ては、必らずしも四時馥郁の香を發するを得ずして、折節に何事やらん面白からぬ事の候ひしとか評判し、落花微塵、最と果敢あくも消え失せたるようにぞ聞こえたる。凡そ此等の風評切りに民間に傳はりたりとは申せども、元來雲深き宮殿に縁りを有たず、又は彼の舞樂會に連り得まじき程の平民たる、凡そは吾人女學子の如き面々に取りては、果して此の如き風評は眞の實際を得たるや否や、茫として夢の如くに辨知致しがたきは勿論なり、然れども只だ其の風評の存したるには相違なく、又此の風評を承はりたるに相違なき吾人に於ては、近頃又々舞踏復活の摸樣ありと告知さるゝに當つて、狹情切りに不審の念を感ずるは、素より止を得ざる次第に候。

抑も舞踏は運動の詩、交際の畫の如きものなり、古今東西、何の所ろに行き何の時に會ふとも、豈に舞踏なからんや、或は獲物を積んで野獸の如くに踊り、或は戰爭に勝ちて棒劔を揮つて踊り、或は男女戀愛を寄せて亂舞混踏す、之を亞弗利加の蠻民に求るも在り、之を倫敦巴里の今世に求るも在り、蓋し人は自然にして歌舞音曲の趣味を賦せらる、思ふに歌なく舞なくしては樂しみを得ざるの趣きや候はん。左れば、昔し天照大神故ありて天岩窟に籠らせ玉ふときは、天鈿女命と云へる女神八百方の神々と共に踏とゞろかして歌ひ舞へりと傳ふ、八百方の神々皆な女神にもあらねば、此時すでに男女の亂舞は候ひしこととなり。又上代の風俗として、男女時ありて山上市頭に集會し、歌謠ひかはし、遊び樂しみたりし風俗ありき、之を歌垣と云ふ。其後漢土の風俗吾に傳はりてより、踏歌と云へる歌垣ようの者亦行はれて、天武天皇正月朔　朝ニ大

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

極殿、男女無レ別、闇夜踏歌と、物の本にみゆるに至れり。我國に於て男女混淆の舞ひは由緣する所ろ如此く遠し、之れよりして男踏歌女踏歌に分れ、后世即はち亦た男舞女舞を生じ、公けには女歌舞妓若衆歌舞妓を出して、男女混淆の亂舞は全く廢れたる如くなれども、而も盆節句月明らかなる夜、試みに八十餘州の村々に入つて見るべし、數年前現に尙ほ歌垣の古風を存して、一種のぴんたゝらを歌ふて圓舞亂舞混舞したるとを記臆すらん。嗚呼舞踏の人間に愛せらるゝは抑も如此きなり、吾人虛心平氣にして之を見れば、舞踏その者に於て果して何の害かあらん、彼の淡泊無心の童男童女庭前に群り、相ひ手を拍て踊り、もしくは兩々交も手を組み手を離合して踊る、之を見るに其の淸きと何如計りぞや、吾人は尤も其罪なきを愛するものあり。

How often have I blest the Coming day,
When toil remitting lent its turn to play,
And all the Village train, from labor free,
Led up their Sports beneath the Spreading tree,
While many a Pastime Circled in the shade,
The Young contending as the old surveyed;
And Many a gambol frolicked O'er the ground,
And sleights of art and feats of strength went round.

左れば吾人もし老莊然として所云る交際社會のラウンド、ダンスを見ば、此と彼と固より相違の存するを知らず、然るに獨り此を見るその彼を見るが如くなるを得ざるものは、抑も何の故ぞ。蓋し舞踏其者たる固より淸し、然れども吾人は抽象的の舞踏を論ずるにあらずして當世に流行する所ろの舞踏を論ずるなり、響尾蛇の毒あるは其の響にあらず、響や金として鈴の如く鳴れり、吾人豈にたゞ其の音を愛して兒女に之を弄ばしむるを得んや。

本月本日、天長祝節を賀して、當外務大臣伯爵大隈重信君、及同伯爵夫人綾子の君は、府下鹿鳴館に官民の知人數百名を招き、舞壇、音樂、花華、烟火の用意兼ねて隈なく相調ひ、午后九時を期し、極めて盛大なる舞踏會を催うされんとす。吾人は平素深く大隈伯を信愛する所ろの書生なるが故に、敢て前段に懷抱したる不審の感を解釋して、密かに自ら慰めて曰く、沈重謹嚴の伯にして今日此の催しある者は、蓋し外交々際の上に於て、何かの御都合候ふ故ならんと。左れば、吾人は元來政治上に喙を容るゝ者にあらざると、況んや事萬一にも外交々際上の御都合に關するにありては、是れ固より尙は吾人の決して知るを得ざる所ろ、亦更に決して言ふを得ざる所ろの者なり、但だ夫れ上風は風の如くにして下に流るゝとを知れば、今日の舞踏會は他日死したる舞踏會を復活せしめ、向后

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

萬一にも斯る特別事情の必要あき舞踏會の大ひに行はるゝに至らば、其の吾が女學の盛衰に影響する所ろ少小にあらずと信じ、今日に於て敢て一言するは、正に吾人の責任なりと信じたり。然れども、吾人は政治上の關係を知らず、況んや亦た外交上の關係を知らず、只だ一個の平民として舞踏會が平民に及ぼす所ろの影響如何を示し、其說他日平民社會に於て舞踏會の行はるゝに對する一篇の老婆言と相成らば、吾人天よ對して其責を盡したりと云ふべし。

○將來の和歌　（一）

左は明治女學校每金曜日の談話會に於て女生の爲に余が演述したる也梁より一日一席の談話に過ざるに會後某生其の筆記なりとて之を余に示したるよ付遂に少か削正して社說の餘白を埋めたるなり他日一文を草して和歌を論ずべし此の篇の如きは拙論中の尤も拙なるものなり。

謠本に白樂天と申す一曲あり、是は唐土の太子の賓客白樂天と云へるが、日の本に參り彼の國の智慧を測れとの宣旨を蒙むり、急ぎ一艘の大船に乘つてはる〲と筑紫の沖に到着したれば、誰れとは知らず、知らぬ火の海に漁どりする翁にあひて、玆に早くも詩歌の優劣を討論したり。白樂天は、磯邊に立つたる岩ほに靑き苔のかゝり、遙かの遠山に白き雲の繞れるを見て、吟ずるやうは、

靑苔衣を負ふて巖ほの肩にかゝり、
白雲帶に似て山の腰をめぐる。

心得たるかと得意氣に申せば、漁翁の空嘯ふいて答ふるよう、面白や日本の歌も唯是に候、

苔衣きたるいはほは左もなくて、
衣きぬ山は帶をするかな。

白樂天大ひに驚ろきて只管らに感歎し、唐船は遂に爰より漢土に歸りたりと謠ひまするが、是れ實に和歌は決して唐詩に劣らぬとの理想を現はしたるものであらう。左れば、日本古歌の作者は其の序言に於て論じたり、蓋し日本人は極めて摸倣に巧みなる人種にて、古來總ての開化を他國より移し入たり、又た凡そ一國民が他の國民の感化を蒙むるには、先づ其詩歌に於て初まるものなれば、若し玆に極めて他に感化せられ易き國民あらば先づ其詩歌よりころ左樣に變へらるべきものであらう、然るに此の摸倣に長じたる、尤も感化せられ易き日本人が、先づ始めて歌を造り出し、又遂に歌を保守したるは、非尋常の事なり、左れば日本に創造せられたるものなし、其の在るは只だ歌の一つなり、日本に他國の感化を蒙らざりしものなし、其在るは只だ歌の一なり、と申したるが、實

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に罕ぼ當を得たる言葉である。左れば、歌は唯一の日本の特有產物、唯一の日本の世襲財產として、吾人が深く大切にせねばならぬものであらう。

然し此の尤も大切なる珍寶と云へども、若し之に不完全なるところ、即はち迚も大に發達するとの出來ぬ所ろの元素ありとなれば、元來之を大切にすると云ふ由緣よりして、勉めて此の不吉の元素をば取去らねば成らぬ、即はち速に之を取去つて、之を大完全に圓滿し得べき性質に移し、未來永劫に日本の特有產物と成り得べき者とせなくては成らぬ。

抑も日本の歌は支那の詩に混じ申さぬと我を張つて、歌に和の一字を加えて和歌と別稱し、詩には特更らに訓を與へてカラウタと號づけ、劃然として之を二物とはしたるが、然し和歌であらうが、唐詩であらうが、白樂天が逃げて歸らうが、何れも皆なポーエマ、即はち韻律音調を備えたる有限の文、一言するに西洋の所云る詩なるものに相違ないです。故に、日本の歌の性質は何如ん、果して之に欠點は無きや否やと考ふるに當ては、先づ詩即ちポーエマなるものゝ正當なる性質効德は何如んと硏鑽するが宜しからう。

詩とは何か、詩人とは如何なるものぞ。吾人が密かに信ずる所ろによれば、詩人に三德ありと思はるゝ」。莊子の云ふに、道は瓦甓に在り、屎溺に在り、天下万物、周邊の總べての物に其の道の存せざるは無い、而して其の万物は何如に冷然として死したるにも係はらず、其中に存するところの道は活として生命を保ち居るです。此處に死したる机がある、此處に死したるヲルガンがある、此机は何如に叩くに係らず無言にして殆んど感じがないが、彼のヲルガンは何如に妙音を發するに係らず殆んど生命が無いです、然し此等が死して居ると思ふは只だ尋常人の考へであつて、若しも更らに一つの眼こを擧て此を見れば、此机も何か物の言ひたさうに、彼のヲルガンも何か悲しさうに吾に訴ふる樣です、耳を欹てゝ之を聞けば、不思儀〳〵、此等の死物は皆な其中に保つたる生命の言葉を發しつゝあるです。然るに悲しくも此の微かなる聲音は尋常の人に聞かれざるが故に、玆に詩人と云へるものが出來つて之が爲に代言するとである、左れば詩人の眼には天地の万物悉とく生て見えるです、草木に對すれば彼は草木と話を致す、山川に對すれば彼は山川と話しを致す、而して山川も草木も此の詩人には明白に其の心を打明かし見するとである。其上え、此の山川草木を初めとして、天地万物は皆な極

めて人間に深切にして、彼等は何卒其心を通じ得たいと平常心配いたし居るとです、夫故、人間若し何事かに憂ひを催うして端なく庭前に出れば、花は最と愛らしく笑つて我を慰さめて居る、月は村雲の間だより面てを出して、世は何處にも憂き事の候と慰さめて居る、鳥は尤も心地よき音樂を以て、虫は尤も味ひある唱歌を以て我を慰さめて居る、然し無情無風流の人々には迚も之を明白に悟ることが出來ぬにより、則はち玆に詩人なるものが出で來つて、此の無聲の聲、無音の音をば通辯いたすのである。故に詩人が萬物をパーソニファイ(人化)すると云ふは未だ可ならず、寧しろ詩人は、彼の萬物と云へる一種の人々と交通交際して、之が爲に代言する所ろの深切なる文人である。

昔しポーロは吾に二人の人ありと申しましたが、亦た彼のエメルソンは全世界の人間を大觀して之を一人の人なりと申しました。實に細かく考へれば、吾が一身の中にも既でに數人の人間が居るようであるが、又大きく觀ずるときは、全世界の人類が一人と爲つて長大足に歩ゆむようである。先づ、良心と云へる者が純潔に立働らかんとする傍はらには、邪念邪慾など云へる宜しからぬ者が切りに妨げをいたす、只だ悲しきに泣き、うれしきに喜ぶ所ろの情感と云へるもあれば、又た輕々しく怒りて極めて惡しきを思ふ所ろの忿怒怨恨と云ふもある、而して此者等が大聲に怒り、大聲に泣き、大聲に呼び哮つて相闘ふのひゞきは、たしかに我が胸臆の中に於て聞こゆるとなれども、愚鈍迂遠なる冷淡の人には決して之が聞え申すまじ、只だ夫れ玆に詩人と云へる極めて感悟の鋭敏なるものありて其耳を欹つるときには、彼の胸壁を通して、騒動のひゞき勝敗の掛引を聞き得ることであらう、然るに之れに反し、既に土中に埋れたるか、又は茶毘一片の煙となつたる、即はち我々が目前に存せざる所ろの人々は今ま何如に思ふか、彼の無言無答のまゝに分れたる過ぎ去つたる佳人君子は、今ま天の一方に於て何如に思ひつゝあるか、もしくは又た太古の昔しに生れて、中世の古しへに生長し、近時の今まに盛ゆる所ろの此の大人は、抑も何如なる變遷艱苦を嘗むつて而して向後また何如に變遷艱苦を嘗むるべきか、其の盲ふ所ろの述懐は果して何如に、もしくは又た、彼の英佛は反き、日米は合し、埃及は衰ろへ、印度は困しむ、萬國萬邦各々敵となり味方となり、又は一盛一衰一起一倒するに係らず、之に通ずる所ろの一大人は抑も何如に感じつゝ、何如に思ひつ

ゝ、何如に望みつゝあるか、蓋し局促としたる近眼的の俗人よは、此の感じ此の思ひ此の望みは决して悟られ申すまじ、只だ夫れ茲に詩人と云へる極めて大ひなる人ありて其の眼こを開けば、彼の古今萬國を通じて、喜ぶもの悲しむもの賛美するもの歯がみするもの等の、歴々として明らかに見ゆるとを認たゝむるならん。詩人は即はち大觀達觀したる極めて細かなる、又極めて大ひなる直覺者である。

然るに、大道の萬物に現はれて箇々の道となる、大能力の萬物に現はれて箇々の生となるや、本來彼此と多少の相違無きものなるかは知らねど、先づ其の尤も多く現はれ、尤も明らかに現はるゝと見ゆるは、人間なるが如し、蓋し萬物中の靈、即はち萬物中の尤も感動せられ易きものとあれば、此の人間にして尤も多く尤も明らかに大道大能力の動かす所ろとなるは、當然の事と思はるゝ。然るに人間の中ちに於て又更らに何如なる人間の上よ其の現はるゝとぞ尤も多く尤も明らかなるやと云へば、即はち眞正の人間、くもりなきの人間、其の魂しひ、其の情、其智性の尤も純潔なる所ろの人間の上にこそ在るべしと思はるゝ。察するよ大道大能力は明月の如くにサエ渡れり、盆中に盛りたる水にして若し全く濟からば、天上二つあきの月も最と明らかに此の盆中に映るべきが、若しも水よして濁るか、雲にして月をかくす時には、迚も斯る反映は之わるまじ、元來上よりの力に感動せられ易き人間と雖ども、若し情智惱煩の雲深く、眞心濁つて淸く澄まざるときには、何如なる大能力、何如なる大道ありて吾が上に大ひなる御手の感動を與へらるゝとも、少さか之を悟ると出來まじ。然るに茲に詩人と云へるものあり、其魂しひは甚だ大なれども極めて純潔に、其の情は甚だ温かなれども極めて純潔に、其の智は甚はだ細かなれども極めて純潔である、即はち心身純潔にして敢て飾る所ろなく、平生殆んど三才の小兒の如くなれども、一度ひ卒然として上よりの感動を蒙るときには、最早此の感動を汚がすものあるなし、インスピレーション純全のまゝに彼が滿腔に入れば、彼は即はち神の如く大觀し、天使の如くに吟じ出すものである。故に詩人は、墜落したる人間中に殘されたる唯だ一つの淸き鏡ならん、天上の幻微直然に茲に映りて、人に神奥の微妙を悟らする者である。

故に詩人は、自然の爲に、人間の爲に、大能力の爲めに、代表代言する所ろの巫である、其の吟出する所ろのポーエヤは、或は山川草本の言はんと欲する所の言葉、或は人情人心の言

はんと欲する所ろの言葉、或は彼の大道大能力の言はんと欲する所ろの言葉である。シエレーの申すに、詩は、尤も善良ある尤も幸福なる心の、尤も善良なる尤も幸福なる時の記録なり、と、嗚呼和歌は果して如此く、歌人は果して如此きものにてある乎。

論説

○日本婦人の洋服（其二）

在米ドクトル　渡邊鼎

却説斯く論じ來りし諸點に就て和洋兩服を比較せば三尺の童子と雖も能く其善惡を判斷するに困しまざるべし然りと雖も或は一種の論者ありて其の是非善惡に拘らず國固有の風を變換するは國粹を損ふものなりとて之に反對するものあるやに聞きつるが故に斯る論者の參考の爲めに聊か述ぶるも亦止を得ざるあるなり。

抑も今日の洋服たる古代よりして終始同形狀を有したる者に非ずして數多の變遷を經て遂に今日の形狀に達せしも古代未だ人智の進まざる時代に在ては洋服も和服も殆んど同樣の形狀の者ありしとは免れ難き事實なるべし諸君試に今五六歳の小兒に命じて人間の形ちを畫かしめよ歐米の小兒も日本の小兒も皆殆んど同一の單純なる形狀の人形を畫き出すを見る可し左れば衣服も亦是と同じく古代未開の時に在ては東西を通じて殆んど同一の單純なりしと推して知る可し諸君試に見よ西曆紀元四百五十年前頃に於て用ひたるグリーキ婦人の服はキートン（Chiton）及びヒマシチン又はペプロー（Himation or peploe）の二種にしてキートンは表裏二枚を縫合せたる嚢狀の服にして長さは頸より足に達し幅は手の長さに均しく且前方一部離開して步行に便ならしめ而して胸下又は帶を纏絡して之を固定せしむる等恰も日本婦人服の單粗なるものに髣髴たり而してヒマシチンは戶外に出るときにキートンの上に着用するものにして羽織の如きものに他ならず。

又眼を轉じて英國中古の服裝と變遷を見よ日本婦人服の振り袖に髣髴たる長き袖の衣服を用ひたるとあり（十一世紀のアングロノルマン婦人にして此の袖を Manuche Sleeve と名く）又地面を掃除するが如き長裾の衣服を用ひたるとあり（十一世紀）又狹隘なる袖に長き切れを下げたる服を用ひしとあり（十四世紀）而して胸腹を緊迫し且腰部を非常に廣張し所謂ファンシンゲールスを用ふるの風は十六世紀エリサベスの卽位（一五五八年）以來流行せり又頭の裝飾に就ても頭髮を二つに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

編みて垂れ下げたるときあり（十四世紀）頭に角狀、塔狀或は螺狀のものを載せたるときあり（十五世紀）丸髷島田はイザヲロカ實に一種の名狀す可からざる巨大の結び方を爲したるときあり（一七八〇年頃）是を以て之を考ふるに洋裝は頭飾にあれ衣服にあれ上古未開の時には頗る單純なりしも中古に至り却て不便不利なる種々の風を造り出し數多の變遷をなして遂に今日に至りて漸く繁ならず疎野ならず稍其の中庸を得たる衣服に達したるも之に反して日本服は未だ斯る進歩に進まずして野蠻時代の陳服に愚を極めたる附屬物を追加したるに過ぎざるものにして恰も歐洲中古の時代の服に稍似たるものたるあり」左れば今我邦婦人の衣服を廢して洋風に改むるは文明の進歩の自然にして所謂歐米同樣の進歩に達したるを表するものなり加之歐米婦人の起居動作の活潑にして鄙ならず日本婦人の不活潑野鄙にして惰弱を極め且身躰の短小なるも亦大に衣服の如何に關するものあるを信ずるなり試に見よ和服を着したる婦人が少しく手の働を爲さんと欲するには襷傳なるものを用ひ所謂贅澤袖なるものを固定せざるを得ず又馳せ行くときには脛脚を露出し且纒絡するが故に手を加へて之を支へざるを得ず又帯の解散するを防がざるを得ず馬に乘るには先づ下駄よりして始末せざるを得ず眞にハヤ不便利を極めたる一の惰服にして到底之を改むるに非ざれば歐米婦人の如く活潑なる業務を執り彼等と共に世に處すると能はざるのみならず又身躰の柔弱をも改良する能はざる可し實に惡を棄て善に移り弱を去り强に進むは文明の然からしむる處にして敢て憚るに足らざるなり彼の富士の山は其形奇にして西洋諸國に其類を見ざるが故に之を壞して西洋諸國に在る山と同形ならしめんと云ハゞ是れ眞に愚の甚しきものにして勿論文明人に笑はれざるを得ざる可きも不便不利不躰裁なる野蠻的の衣服を廢して美にして繁ならず雅にして俗ならざる所の衣服に改むる何ぞ耻る所あらんや諸君も必ず記臆するならん四五年前の夏頃日本人見世物歐洲に到りしとき歐洲人民は日本服を評するに如何なる言を以てせしやを伯林の人民の評に云く日本服は實に世界無類の服にして蓋し古代未開の時に唯布片を身躰に卷き付けたりしとありしが只少しく之に工風を運らして所々に縫附て手足の出る迄に爲したるに過ぎずして支那の衣服に比すれば遙かに下等のものなると明らかなりと又伯林の他の新聞には日本の婦人服を見るに歩行する毎に脛脚を露出し恰も半裸跣足と一般の醜躰にして一度歩行するときは

○舞踏の利害 （寄稿）

月の舍 忍

舞踏の利害何如と問へは一種の人々は直ちに答へて申さるべし此の文明の時世に會ひ何事も西洋開化の風習を移す今日に當り苟くも男女交際の無くてならぬ事を知らんものは亦此の舞踏の必要欠くべからざるを知るべし何も事々しく其可否を問ふべきものかへと冷笑して吾人を不風流の野男か又は頑片張にして此遊に列し難きバイロンの流亞ならんとぞ云へるべし然るに更に顧みて之を一種の人々に問はゞ此流面に憤慨の氣を現へし胸を拠して威つて云へん舞踏へ文明の地にだも尚は有識者の不快とする所なり然るを從來相ひ授受せざる程の男女忽ち相抱き多年席を同うせざる程の人々急に混淆して淸潔の操之より起ると云ふ乎政治家はピットの如く學者はカントの如く武人は武藏坊辨慶の如く婦人方は小野の小町の如く情慾の愛を見るど猶は秋草の露を見るが如きの人にあらざる以上は弊害之よりして百出せんと辨論せらる因つてつらつら考ふるに右二種の方々は何れも一方に走りて一方の事を知らず而も其利を主張するの所甚弱くして其害を述ぶる所亦慾しと云ふべし斯る論鋒にては舞踏を贊成し舞踏を不贊成する双方の面々を滿足せしむるあたはず其辨還に無効に失するの憾あらん思ふに此事の利害を論ぜんとには先づ(一)能く舞踏の何物たるかを知り次に(二)其歐米に於て何如なる結果を生じ且つ何如なる風評を其世間より受るやを考へ而して後ち(三)現に今の鹿鳴館に於て何如なる利害を實際に及ぼせしやを承知するを要す斯して此遊の是非を宣決せば甲乙二種の人の心中に隱れて之を口にするの言譯なき數多の志想へ寂くべくも顯然として此紙上に出現すべし。

依ては最初舞踏の何物たるかを承知するの一事は先づブボック、スペンセルの兩大家並に英佛米及び日本の新聞記者數名を詔ふて其說明を煩へすとをし次に歐米文明の地に於ける此遊の結果及評判何如と云へる事につきては彼地に於て舞踏の害を尤よく述べ盡したるものと其利を熱心に主張したる者と彼此ともに非常の雄辯を揮ふもの等の議論を法庭に立たせ舞樂會の紳士貴婦人諸氏を擇して證人の席に招き黎らせ我が悲憤慷慨の志士を傍聽の欄內に鎭づめながら拙者を陪審官として吾人敢て自ら之を裁判するを以て尤も簡に且つ尤も便利なるものと議定せり。

斯て第一席の陳述には希臘酒神の傍に踊り燃火蟠蛇の邊に舞ふ初代の舞踏より約翰の首を見て舞ふ婦姫を經てパリー、ロンドン、ワシントン、の夜會に至り天の岩戸に踊りたる天鈿女命神より靜御前を經て鹿鳴館の舞踏に至るまで精細漏らす所なく舉げ掛したり然るに之が筆記は當今多事の日に掲載すべきものにあらず他日追て之を公にするの機あるべしとして第二席の景況如何あらんと見てあれば米國サンフランシスコの一紳士ウイリアムヘルマンは黑の禮服に慇を示し顯然として出席せり其右の手に携へたるはダンス、ラブ、デッスと云へる自著の舞踏論にして左手に携へ佐の紙を抱きたるへ此書を批評したる諸大家の論文とへ見受たり。

ヘルマン雄んで起立し先づ魁壯の容を成して靜かに申す樣は判官閣下拙者は兼て舞踏の有害なる事を確信し之なる一小册子をば著述致したる儀に付精細の意見は何卒此書に由て御承知被下度と之を捧げ出し乍ら只今は僕に發端を申して閣下の明察を斷る以ても拙者事は元來舞踏の何物たるやを心得ずして彼此と非議致す譯には無之抑も少年の頃は每夜の樣に夜會に出席しあはれ姫御前の御手をも握りて

一二度のヲドリを試みたるとも之ある者に候が何分之を有害なる結果を生ずべき者と認めたる以上は再び之に臨席するは勿論世上幾多の娘孃壯士が滔々として道德の地獄に陷らんとするを見ては決して默止すべきとにあらずと存ずる儀にて候御承知の如く夜會の燈光眩き迄に照り渡り蛾のはひ出る姿まで見らるゝ折柄音樂の音色なよやかにして絲を弄するが如し何如なる憂鬱沈衰の蕩男淫女も心地自ら飛び上りて足拍子打たうずるとする比に至れば只見る双々相抱いて胡蝶の翩躚たるが如し佳人の頭は男子の肩に倚りて其好顏男の耳の邊に向へり露はしたる胸は頸をまとひ波立ちたる胸は胸に密接して呼吸出沒し足へ足にまとひて蔦の松に於けるが如し男子の剛の右の腕はシカと女の腰をしめて轉々たるの都度之を吾が躰にひし〳〵と壓し付く佳人の流るゝ眼光は常に男子の上にあれども何物をも見ず音樂われを囃し立つれども耳に其の音をきかず遥に潮の響をきゝ夢の如く立舞ふと覺へてわが全身いよ〳〵男子の五躰に密着す此に至て淑女が固有のはじらひ何處にやある男子の呼吸はわが髮の毛の上にあり男子の唇はわが額の邊に離合す今果た之を恐るべきやは斯て樂やむ手足則ち離るドウと椅子に腰かけて扇子遣う手も尙ほ重かるべし……

判事、コレ〳〵ヘルマン斯樣なる論釋は法庭には無用であつて只だ聞づらい迄じや確に舞踏の有害なる要點を開陳致せ」賢明なる大判官閣下、暫時御容赦を請ひて申述度は右樣の次第が若し年若き娘孃方と少年との間に於てこれあり候はゞ爲に眞に高尙淸潔なる交を起し文明の交際と云ふて恥かしからぬ程の結果を生ずべしとは實以て得思へれまじき儀と被存候且又此遊び若し既に夫ある妻と餘の男子との間に取組るゝ節は尙以て氣の毒に感ぜらるゝ事少からず令閨は眞に御上手でと賞められハァ有難うとは答へ乍ら心中決して安からざるものと察せらるれば例令ひ寬大快濶海の如き大量の夫にて在らんとも此の遊の爲に夫婦が間の愛情を増とは存ぜられず歸路同車の上に於てやうやく互に心を取かへすと云ふ辛苦も實際にはこれある習と承知いたし候然らば舞踏は未婚の人々に取ても賞むべき交際法にあらず既に婚したる者に取りては決句和樂の故障と相成るべきものかと信ぜられ扨ては前申すような說明をも恐る〳〵開陳致したる義にて候。

成程其方が申す所一應は聞へたが前段に說明したる樣なる舞踏の致し方にては双方到底淸潔の交際は出來ぬと申す事か簡畧に承へり置たい。

何如にも左樣確信する所にて候凡そ人間には肉と靈との二つこれあり相合して人の一身を造るものに候が人物の高尙卑屈など申すは必竟此の二元素が勢力を及ぼすの多少に由る事と存ぜらる彼の上流の紳士貴婦人たるものは則ち多く靈の支配を受る方々なれば其遊も樂も皆な自然靈の上に於てせらるゝ儀なり決して肉に就たる卑しむべき交等はあらせられざる筈とは定るとなれども人間は元來甚だ弱きものにて其一身には自ら下等の慾を恣にせしめんとの動が數多ひそみ居る其摸樣を云へば乍ちにして肉慾の情を熾んに起さすべき一の彈機之れありこの彈機をば靈の衣を以て溫和に被ひたる歟の樣あるものゝ處所云る禮に適へざる過度の行を爲せば乍ちにして此の彈機が外れて最早靈の力を以て制すべからざる情慾火を燃やす如くに熾と相成るものなり然るに彼の舞踏の如き其遊自身の性質は固より罪なき小供らしき樂には候へども手の觸るゝ處足のまとふ所唇の接し腰の密着する所遂には平生双方が嚴めしく禮式を守りたる所の心を

緩うし一歩一歩と怔れ〳〵しく近づかせて遂には彼のハジキを外づさしむるの地ゟ迄で至らするものなり此に至りてハ最早辨慶の馮も其肉慾の奴隷となり小町のたしなみも徒らと相成るべし故に吾等人類ハ眞に弱き者であると覺悟し乍ら扨て互に戀を立つるの上に舞踏の利害如何と云ふときは實に戰慄して之を有害と斷ぜざるを得ざる事に候判官閣下伏して明察あらんことを乞ふ。

ヘルマンの申分先づ右樣の箇條にて了ると申すか左らば追て又問ひ質す事もあるべし次に被告人簡略に其信ずる所を申せ但し決して討論がましき事を申すな能く〳〵注意致せ」。

飛り出でたるは原告ヘルマン氏とは折々面會も致したるミッセス、ミルトン、ボーエルスと申す者にて候原告がダンス、ワフ、デッス、を著述ありて餘り法外なる非難を舞踏の上に施されたるに付女性の身とは云へ辱くも既に學士の稱號をも得たる妾なれば道の爲に默止がたく一書を著して答論いたし候其書は即ち之にてダンス、ワフ、ライフと申し相應の理由は相述べましたる心得に候へど討論がましき儀無之樣と判官樣の御心添につき之れを閣下に呈上して御一覽を乞ひ置き今は妾が信ずる所をかい摘んで申上ます、原告は固より凡そ此遊に反對遊ばす所の方々は妾等が殿方と相抱き相密着したればとて則ち以て何か怪しかる不品行の事を致せしやうにも思し召され或は又之よりして不測の害を起すに至るべしと迄心配遊ばせども乍憚之は彼の古話の鰻臭をかぐ者を責ると同樣かと思はれます御存知の如く古しく鰻屋の隣に住つて毎日蒲燒の香を嗅ぎ之を馳走にお茶漬で濟せし男ありしと思し召せ鰻屋の主人殊の外に怒り月末番頭を遣つて鰻何本代若干を頂戴いたしたしと責め立たれば彼男なかなか拔らぬ顔にて財布の金を高らかに響かせ乍らサ之にてお拂は濟みたりと申せしよしなり今ま舞踏の際相抱き相近よるものを見て之を怪しかる事を爲すものと心得らるゝは所謂る鰻屋の主人早合點して人を責むるものにては候まじくやまた〳〵……

コレ〳〵夫人其ようなる事は皆な其方が著書ゟ記してある事じや別に簡短に信ずる所を申されたが宜しからう。

然らば急所と信ずる所を一言いたせば原告などが舞踏は惡しき心持を起すものジヤなどと夥の樣に喧しく申まするによつて元來何の氣もなく子供らしき心得にて舞踏いたしたるものが之よりして變なる感覺をも懷くように相成るものなり既に原告の著書は舞踏の害を辨ずるよりは反つて舞踏をして新に害を起さするものと爲せしとの評判を受けましたは即ち此處の處かと考ます抑も英國にては小學校にてすら舞踏を教ゆる次第歐洲諸國は固より我米國の諸州にても皆な上流有德の人々が之を試みて遊びとし何の害もあらざる者を如何に君子國なればとて貴邦の人々が餘りに之を御心配遊ばすはチト臆病過るかと思はれ尚或は西洋の交際方を知らぬ不意氣のお人かと存ぜられます特に當今男女交際を大切なりなど論ぜらるゝお人は甚だ多けれども偖て何如にして其交際を爲さば宜しきやと云へるとには餘り御名論を承はらず其時ゟ至りては到底舞踏の如き遊びを致さずては中々多人數中の交際は出來るものには候はずかた〴〵舞踏は利ありて害なく害ありと云ふは所謂影を見て實ありとする臆病主義仕梳坊主義かと相考候まゝたゞ〳〵其大略を申上ます。

成程御申條よく相分つたが原告何か承り度儀あらば此際本官に對して申置くとも苦うないぞ。

有難い仰せ然らば一應判官閣下に言上し置きたし被告は原告等が兎角舞踏を以て不道德の遊と心得るやうに思はるゝ如し之はくれ〳〵

も誤りたる見解にて拙者等苟くも封建男子にて有らざる限りは此ようなる事は申さず但だ舞踏は男女の間の遠慮心を緩うし特に女性が固有する謹愼の風を減じ其間の禮式自然近きに過ぎて遂に狎れ〳〵しき交を爲すに至らん此ヿ至れば諸共に弱き人間は罪を侵すの迯尤も多くして測らず其穽に陥るとありと云ふ迄にて其結果よりして有害と申す義に候かの錢屋の例は此儀に何たる効能あるものにや承り度候次に外國及米國の事を種々と引用されたるが元來幼き時より學校にて男女相舞踏することを學びたる者供は自然此遊を何とも感ぜず全く罪もなき小供らしき樂とも心得申すべきが左樣の事なき國々特に多年男女の間を尤も隔離して相談話するすら耻らうやうなる國柄に於ては決して彼の開化したる外國に於ける實例を以て論ずべきにあらずと思はるゝに況して我米國の如きは被告も現に承知致し居らるゝ如く凡そ道德堅固の人々と云はるゝ社會に於ては決して此遊を用ひずたゞ紳商とか遊好とか富裕とか申して世俗で所謂る上流社會と稱さるゝもの等のみ之を面白がると云へるヿ由りても當國人が此遊を見る眞の感心を示すものと存ぜらる然るに此の世俗的の上流社會が之を行うと申して直ちに之を貴國などの上流社會に推及ばし米國にも既に然々なりなど申さるゝは眞にわが米國の道德を無したる愛國心なき事にて候のみか貴國の方々に對しても實に申分なき儀にては有まじくや次に又多人數の交際には舞踏の如き遊ならでは無効なりと申さるゝが一躰舞踏は碁將碁などと同類の遊にて實は二人に限り適すべきものなり眞や多人數を一時に喜ばすべき性質のものには候はず之よりも相集りて面白い談話を聽くとか又互に往來し入亂て交く談話するとか云へる方が遥に多人數の交際に適するものと考らる然るを諸人が往々舞踏を以て此目的に相應するものと心得るは如何なる見解によるものにや之亦被告に尋ね置たく候以上三の箇條何卒判官より宜しく御尋問被下樣に願候。

イヤ之は最早討論の種と相成り宜しからず原被兩造ともに此外新に申陳べき箇條なくば之より證人方の辨明を承りたし舞樂會々員諸君の中御苦勞ながら我國に於ける舞踏の結果何如を御談しありたい。

證人席より突立上られたる紳士は八字髯鼻下に龍井戸的の橋を架し燕尾服胸ひろ〳〵白うして流石に美男子の風あり一つ二つ咳拂し春の戸出る黄鳥の聲して申さるゝは拙者等は本來舞踏を實際に試るものジヤガ某等の申すような事は夢斗りもない反つて其利益は中々數ゑ舉られん程じや（ノウ〳〵）貴婦人方は之が爲に餘程丈夫になつて近來の顏色の好い事チウモノは決して昔し深窓にお出になつた時の比ではないテ第一健康に宜しひ（ノウ〳〵）交際に宜しひ（ノウノウ）之で清潔な交際が出來んなぞと云ふは必竟影に居つて想像ばかりして居る者の言ふ事じや（ノウ〳〵）先づ遣つて試るが宜しい（ノウ〳〵）先づ（ノウ〳〵）仕て（ノウ〳〵）見るが（ノウ〳〵〳〵）。

傍聽人何故に左樣にさわぐか失敬である靜かに致せ證人の方眞に御苦勞で御坐る當法庭元來寛大を主と致せば箇樣なる不始末なも生じお氣の毒に存ずる扨て以上の事件は陪審官たる讀者諸氏と協議の上判決いたすべき事と預定いたしたる筈なれば追て再び開庭の上宣告致すべし」と申し一時法庭を閉ぬ」。

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

忽ち其の美を失ひ人をして一見其の粗野を厭はしむるのみならず其の内足に歩む恰好はエゴ〳〵然タコ〳〵乎として恰も家鴨や龜の子の如く或ひは脚氣症に罹り足の內攣を起したる人と一般なり我邦(獨乙)の婦人をして日本婦人の服裝の躰裁を一見せしめば忽ち喫驚仰天し婦人たる者は如何に着服せざる可らざるかを知るの手本となる可しと又曾て外國の或る新聞に日本には裸躰者多く遠方より一見すれば殆んど亞非利加の黑奴に異ならざるも只躰格の短少なるに由て僅に黑奴ならざるを知るに足る位ありしが今日にては復た市街に裸躰者を見ずと雖も之に髣髴たる衣服を爲し居る者は依然たりと嗚呼日本婦人諸君よ和服は斯く迄に野蠻視せられ擯斥せらるゝものたるとは定めし諸君の腦裏に銘せらるゝ所なる可し予輩男子ですら一度之の評を讀むや慚汗衣を潤し肌粟を生ずるの想ひあらしむ婦人諸君の感覺果して如何ん諸君之を聞きて恥づる處なきか。（未完）

むかし或人の家に屏損じたりければ其の子の云ひけるはかく屏の損じ候盗人とり入るべけれと云ひける暫くして隣の人來りて其の子の云ひしごとく屏の損じ候ぬす人こそ入るべけれといひしが果して其の夜盗人にあひけり其の親我が子をば智ありてよく察したりと思ひ隣の人をば此の人かくとり云ひし若しや盗人の手引などしつらんかと疑ひけるとなん。

批評

○情

さら〳〵身に覺えなけれど、妾わが宿せし實子ぞと名乘りて出來れるは、情と云へる新雜誌なり、去る廿五日第一號發兌せらる、中村修一氏發行人兼編輯人たり、後藤宗秀氏印刷人たり、社は眞情社と稱して府下飯田町五丁目廿番地にあり、毎月一回發兌、一冊卅二頁定價五錢半たり。其の發行の主旨とする所ろは、

才智は何如に高きも學識は何如に博きも熱情なきものは何事をも成すと能はず……吾人は確かに情の勢力を認めたり同胞の人々をして高尚正大の心情を發達せしむるに於て聊か力を盡さんを欲す。

無味乾燥なる當今の沙漠世界に、如此き多情深切の雜誌出現したるは賀すべきと也、其の女學雜誌を評するの一項には、

女學雜誌は謹嚴を以て自ら誇る所の雜誌なり斯く謹嚴なる雜誌にも似ず其第百二十四號中には我思ふ美人と談話の出來る法と題せる滑稽を團々珍聞より轉載し愛嬌多き婦女子の一笑を博せんとせられたり笑ふべき場合に笑はざれば和を傷ふと云ふ意味にて彼の一笑話に微笑を催されたる淑女もあらん高笑を發せられたる才女もあらん然れども中には堂々たる女學子がつまらぬ滑稽を以て妾等を笑はしめんとするは實に馬鹿げたる事共なりと眞面目に怒りて小言を出されたる野婦もあらん兎に角謹嚴なる雜誌には斯る滑稽を載せぬ方が宜しからんと存ず。

吾人は、日本の文學社界に、如此き注意を寄せらるゝ友人の現るゝに至りたるを感謝す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○都の花

中根香亭、山田美妙、兩才子の擔當にて、府下金港堂より彌よ〳〵都の花第一卷を出版したり。此は蓋し向后甚だ女性社會に愛觀せらるべきものなれば、茲に恭やしく其新刊を祝して、且つ一言を呈せん、抑も都の花は兎角華美なるが好まる、彼の山里に香ふ山櫻、岩頭に節を高うする風蘭は大方た愛されぬものなり、然し兩才子若し此等をも移し植ゆるの手際なくんば、ヨモ高尙の花造りと申されまじ。

○山田美妙大人の小說（其二）

不知庵主人

矢野ぬしが經國美談は名文なるや否や其點は兎も角も其緖言に源語の前に源語なく曲亭の前に曲亭なく云々といはれし如く大人の前に大人の文なしとて是を訴り是を毀るおのれにはあらず大人が一流の新躰を創造せられし其才思にはおのれ常に敬服すれど少しく其文躰に就き疑ふべき節あれば管見を記して大人に正さんある翻譯小說家は非言文一致の我文字を以て言文一致躰の文を作るは無理なりと申されたが此文學者は何を證として我文字を非言文一致とせらるゝやおのれは此點に就て其說を異にせざるを得ざれど眞正なる言文一致は靈活なる文字を作るを得じと信ぜりうは演說筆記を見ても牡丹燈籠を讀みても知らるゝ事にて人々が談話するありのまゝを直寫すれば更に趣味なし故に文字を活して使用ゐ文章の美術たる所以を顯はさんには勢ひ日常談話と相違せざるべからず西洋の文は言文一致なりと世人常に口にすれどもおのれが眼を以て見ればヂッケンスの如きサカレーの如き地の文は言文一致ならぬ所多しこは無理ならぬ事にして勁健峻峭端麗婉曲等の妙味は非言文一致にあり畢竟するに世人が言文一致論を喋々するにも關はらず眞正の言文一致容易に行はれざるも是が爲めのみ唯大人が文は是迄に比類なき働きを顯はしたれど是すらおのれが目すれば眞正の言文一致とは申されがたくして眞正の言文一致ならぬこそ妙作傑著も隨て出づべしと大人に望むなれ大人が筆はマーリヤットに似て至微至細を盡て餘蘊なき事大人が想像力に富みし故とは云ひながら一ッは大人が新文躰是が助けを爲すが如しされどもおのれがおさなき考より云へば外國の言文一致說は兎も角も我國には我國固有の文躰あり遠き源氏狹衣の昔より年つき重なるにつれて或ハ近松が淨瑠璃となり或は鶴屋が臺帳となり或は馬琴が稗史となり或は春水か小本となり何れも文學界に立て賞でらるゝものなれど謠曲戲曲の類を暫くおき小說文躰を解剖すれば馬琴京山種彥振鷺亭等は雅俗折衷躰を以て賞せられ中にも馬琴種彥の文流麗なる事は世間一般の定論なり又京傳（因に云ふ裕妻表紙醉菩題等は京傳の本色に非ずして惣まがき吉原揚枝の類こそ其長處なる事御承知なるべし）三馬一九春水等の俗文は今日やかましき言文一致にちかきものと思はるれど地の文に到りてはつまりは雅俗折衷たるを免かれず思ふに富艷と豪宕を兼ね滑稽と曲麗とを併寫すべきもの雅俗折衷の外にあらざるべし大人が文は一流獨得にして一種の妙味紙上に躍然たれどもおのれが申せはチト憚り多けれど田舍人が折りたる花の如く薔薇の色美なりと雖ども枝態もあしく折口などとげ〳〵しく無下にいやしふ覺ゆ殊に大人は下流の言語を重に用ゐられしが「了解し易からんが爲め」としいへば道理ある如く聞ゆれど「何々ダ」「オイ何々」など大に風韵に乏しく情なくも是が爲めに大人が作を退くるものあり大人がいや高き御見識にては彼等は小說眼を持たずと一ト口に言消し給ふか知らねど一二不穩當文字の爲めに大人の好著作を知らしめざるも殘念に候はずやされはとて馬琴の文を學ぶべし種彥の文に倣ふべしと申すにはあらず大人は何處迄も大人が得意の文を練修せられん事を望むといへども今日のまゝにては大人が光彩を發暉する事難く却て大人が天資の美妙を損ずる事もやあらんと心配せらるゝ大人が文は極微の分子を描寫するに足れど京傳三馬が地の文躰にても隨分極微を寫せしものあり此文躰を以てすら六樹園は手ぎわよく筆を回されたるは「都の手振」「吾妻なまり」を見ても知らるかく申せばとて地の文は必ず雅俗折衷にすべしと大人に勸告するにはあらねど博雅なる大人は如何なる御說を持たるゝや御序もあらば御示教あらん事を願ふ又大人が比喩造語はあまりに高妙にしておのれが如きおろか者には却て高妙ならずと考へらるゝものあり大人は西洋文學を研究せられしと見ゑ何れも斬新奇抜にして昔日の文學者の如く吉野の花は必ず雲と云ひ龍田の楓は必ず錦と云ふ陋習を免かれたれど過ぎたるは猶ほ及ばざるが如く勸めて新文字を作らんとし却て文躰を損ずるもの少からず大人は何故に悲哀の文に滑稽の文字を揷まるゝや大人何故に艷麗の文に豪宕の文字を揷まるゝやおのれとても艷麗の句は雅言を用ゐ豪宕の句は漢語を用ゐ滑稽の句は一九を學び悲哀の句は馬琴を擬し恰も琉球王廷に現はれたる禍獸の如き文を以て滿足するにあらざれど全く寄切れにても婆ア樣が丹精したるものも茶人か苦辛したるものとは相違すべく例へば廣東切と古渡更紗も相隣りするも二子と眞岡と接ぎ合するも其結構の良否は唯配合布置の如何にあり近時のデモ小說家が馬琴種彥の文句を盜み剪切らぬ雅言を雜へたるあやしき文章に比すれば天地の相違なれど大人が文はチト考へ過ぎたと申すより外なし大人はあまり頓智頓興に富み殊に是を濫用せられし故酸鼻痛嘆に堪へざる處も相應しからぬ言葉の爲めに忽ち消散する事圓遊が人情話を聞く心地ぞせらる本居宣長翁が「たゞかいなでにこゝかしこ艷なる詞をつかひよしめきてよみなし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かきちらしたるをば實によしと見て人のもてはやしはめたつれば志たりがほすめる」云々と曰はれし如く今日行はるゝエセぶみほど傍腹痛くぞ思はるゝはなし唯大人ばかりはもろ〳〵の書物を讀まれしと見ゆれど物には釣合といふ事あり鼠小僧に百日鬘四天も妙なもの西行法師が金襴の袈裟を着るもをかしからん團十郎が自分一人の時代衣裳に味噌をつけたも仲藏が定九郎の粉粧にヤンヤと賞められしも皆是釣合の二字に依れり菅茶山が曾て申した通り飯碗は飯碗の使用にすべしたとひ其形奇なりとも若し飯器にて酒を飲まんとし強て水呑に代用せんとせば妙語佳句を成しがたし大人よフロックコートを着するも可なりジャケットを着するも可なりマッタ黒縮緬の御羽織も仙臺平の御袴も隨分立派なるべけれど必らず假裝會の仲間入をなし識者の笑を買ひ給ふな。

Novelists pluck their events here and their fortune there, and tie them rashly to their figures. Great is the poverty of their inventions. "She was beautiful, and he fell in love;" these are the mainsprings, —— new names, but no new qualities in men or women. とは奇警なるエマーソンの言葉なるが借りて以て今日の小說を許するに足れり前にも申せし如く世態風俗日に變る此社會を數十年前の馬琴種彦の趣向を以て寫せばとて三ッ子も感服せんやマッタ演說筆記を挿み民約論の拔書を入れ相の手に梅暦時代の氣性を持ちたる貴婦人を出せばとて具眼の士誰かは顧みるべき大人はさすが是等の病を兎かれ鷄群の鶴とも思ゆれど若しおのれをして直言直筆せしめば大人が作とてエマーソンの嘲罵を脫るゝ事能はじ大人が著には演說風の議論もなく古めかしき怪談もなしされども大人が人物はいづれも仝樣にして new names, but no new qualities. の嘆なき能はず何故に大人が濡事師は盡く文學者にして大人が立お山は皆學校生徒たるや世界は廣し人民は多し上は錦囲玉障の中に垂簾て古人を友とし給ふやんごとなき方々より下は軒端もる月を燈にマッチの箱を張る賤婦にいたる迄凡そ小說家の網羅すべきもの豈獨り文學に堪能なる風流學士「さうダワ」「なくつてよ」のあどけない令孃のみならんや「チエスト」と罵るこわからしき九州男兒も「オ、志んど」と言ふ裊娜なる西京佳人も以て一對の主人公となすに足らんエセ作者の爲めに殺されたる燕趙悲歌の壯士も竹槍席旗の參謀も靈妙なる大人が筆には復活せん元より大人はリヤリストなれば盡善盡美なる聖人賢者を望まず抑て尋常有觸れたる人物こそ望ましけれ獨り大人のみにあらず此頃の新小說家は大抵書生社會にありしもの多ければ此社會の情態を寫す事尤も得意なるは怪むべきにあらざれど其最も容易なるに任せて唯此社會のみを以て材料となせば篇の重なるに隨ひ愈々陳腐とならんおのれ常に春水派の小本を讀む每に其人情を穿つの細かきを愛すると仝時に卷中の人物盡く仝一なるを怨む今日の小說を論ずる者復た此點を以て春水を退けて曰く「色男はいくぢなしにして孃樣は浮氣なり」と勿論世の中は廣ければ藝者の厄介になる色男なきにもあらず跡見送りて扇子を落す孃樣あるやも知らねど每篇の人物を新奇にせざりしは春水が爲に惜まざるを得ず大人よおのれは敢て役行者を望まず又伏姬神を願はず唯少しく大人が眼を開き鐵道馬車の中緣日の群集丸の内の堀端芝公園の松林に隨分かはつたる人物を得べし好材料のある所は本鄕小川町の往來下宿屋寄宿舍のみならんや明窓淨几に倚り沈思熟考あらば奇想棚の上より落ちずとも云ひがたしまだしも大人が著は十數篇に止まれば彼是批評するもの少なけれど若し未來に於て春水が轍を踏まばおのれが失望は如何計りに候ぞ大人よ願くはエミルゾラの如きリヤリストとなつて「ナヽ」「ラブ、エピソード」の如き絕好小說を綴れ。

山鳥の尾の長々しく大人もさぞかし厭き給ひしならんおのれも最早書厭きたれば猶ほ大人に望む所を列擧して筆を止めん大人よ大通となつて扇パチ〳〵の連中を喜ばしめんとし給ふべからず野暮となつて天保親父の感賞に預からんとし給ふべからず學者振て馬琴を氣取るべからず勸懲めかして春水を眞似るべからずエセ詩人となるなかれデモ音樂士となるなかれ我々が唯一なる神天地の造り主にあらざれば全智全能なる事能はずおのれは大人が美男子なりと賛めらるゝを聞くも喜はず大人が風流紳士なりと噂さるゝを聞くも樂まず唯大人は立派なる小說家なりと指摘さるゝを聞かば黃金の釜を掘當しより滿足可仕候。多病なる才子美妙齋大人の健康を祈り併せて小說界の新駒に雜言を呈せし罪を江湖の貴婦人令孃に謝す。

○近時の女學論

一。人工早產の實驗

醫學も亦た進步したる哉、之が爲に我女性の幸福を蒙ると幾干ぞや、去月發行したる中外醫事新報第二百五十六の兩號は、在獨逸ストラスブルグ醫學士佐藤恒久君が該府の病院に於て實驗したる人工早產の成績を擧げ、元來五回ともに安產することを得ざりし婦人に施術して遂にやす〳〵と玉兒を擧げしめたるの吉報を示さる。

二。娼妓公許の利害得失

此頃ろの東京日々新聞には、法科大學生渡邊千代三郎氏が娼

妓公許の利害得失に關する一長論を連載したり、其の論の骨組は左の如し、

利益

○娼妓自身に對し　●（經濟上）一家の困窮を救助すること。女紅場の制度ありて正業を知得すること。安樂逸居を享受すること●（道德上）身を犠牲にして孝貞の道を盡すこと。偶生之幸福。

○社會に對し　●（經濟上）貨幣の融通を盛にし土地の繁榮を增進すること。他府縣に流失する貨幣を減少すること（近隣府縣に娼妓の制ありて一縣にあらざる塲合）。賦金の收入あること●（道德上）私通を減ずること。私娼を防ぐこと●（衞生上）黴毒蔓延を防ぎ及び其病症を輕からしむること。止むを得ざるより獨身なる者に獸情を充たしむること●（政治上）犯罪人を減少すること。探偵事務を容易ならしむること。一定の行政法を以て監理する便あること。私生兒を減少すること。

弊害

●娼妓自身に對し　●（經濟上）後來正業に歸復する期圖なき遊民となること。節儉を忘れ奢侈の風に流るゝこと●（道德上）道德心を衰耗せしむること。身體を卑賤にすること。自己及び其の親子兄弟が社會より擯斥さるゝこと●（衞生上）身體を衰弱し子孫の蕃殖を害し及び病毒を遺傳すること。

●社會に對し　●（經濟上）不生產的消費を增加すること。生產的資本減少し貯蓄の念慮を減ぜしむること●（道德上）淫逸柔弱に流れ元氣を損し敎育を妨害すること。背德者を增加すること●（衞生上）病者を增加し病毒を遺傳し及び人口蕃殖を妨害すること●（政治上）國體を損害すること。犯罪人を增加すること。政務を增加すること。

渡邊氏は此の利害を對照したる迄にて別に判決を爲さず、然れども必竟娼妓公許は止を得ざるに出でて之に利益ありと云ふも只だ消極的の益に過ぎずと言はれたり。實に然り、而して娼妓公許を止を得ざるに出づと言へる論者は。此止を得ざるの事情は何の日にか止を得るに至るの望みありやと考へざる可らず、吾人は之を全廢するの固より困難あるを知る、然れ共此困難は到底數十年の間に其の度を減ぜずして寧ろ追々に増加すべしと知らば一刀兩斷、先づ速かにこれを禁ずるは今日の當務にあらずや。

吾人が妓樓全廢に關するの論は、女學雜誌第九、十、卅五、五十八、五十九號にあり。又國民之友第二十一二十三兩號に植木枝盛君の賣淫公許禁止論あり。讀者幸に參看せよ。

叢話

○婦人衞生一斑（姙娠養生の事）（其三）

櫻井郁次郎述　佃與次郎筆記

貧富貴賤によりて格別の事　然しながら、人には貴賤貧富と云ふものがありませう、是れは社會の有様で免れざるの數でありませう、貴き地位に居る人、富で居る人、貧しきもの、賤しきものなどは、同一の生活を爲すことの出きぬは勿論、儉束で遣ることも出きない。ソレ故に爰に斟酌をしなければ、到底行はるゝことは出きない。滋養物がよいと云ふて、貧乏人にさとしても、車夫一日の勞動を以て一回の晩餐を償ふことも出きません、併し新鮮の大氣とか、淸潔とか云ふことは、注意次第で誰でも出きます。殊に我邦の人は、湯に這入ります、大底貧しき暮しをして居るものでも、毎日一回づゝ入浴するの習慣であります、詢に是れは全身の淸潔法に就ては、宜しいことでありますが、然しながら只一の慊しむ所は、湯に入りて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

身は清めますが、衣服が實に清潔でない、殊に夜分に臥します夜具などは、三年に一度、五年に一度しか洗濯はしない、毎日入湯しても不潔の衣を纏ひ、不潔の夜具に寢る、何の益になりませう。是等は、一に注意次第で例へは洗濯をなさば貧富貴賤の別なく、清潔にすることは出きるものと思ひます。

姙婦が下を洗ふ事　清潔のことに就て、序でに一寸申して置ますが、彼の姙婦の陰部を清潔にすると云ふことがある、是れは、大抵、世間で能く行はるゝ器械杯があるから、夫れで通例列氏の撿温器で二十六度位の微温湯華氏なれば九十度位の微温湯を以て、陰部を洗滌します、是れは誠に必要のことである。彼の白帶下と云ふものがあるが、惡るい性質のものなれば、隨分害を爲します。生れたての小供が、激しき眼を病み膿毒性の結膜炎など丶云ふ最も危き眼病になります、之等は下の方に汚物がありて、其の清潔法を怠りたる爲め、眼の中に這入ても、産婆の不注意より眼の毒が取れぬあど丶云へば、生れながらにして失明と云ふ程にもあります。是等は隨分清潔法を以て防ぐとが出きます。

姙婦の衣服の事　養生法に就ては、衣食住と云ふことを申します、是れは詳細に申さねばならぬ。先づ衣服で御座い升が、衣服は形容のとは捨て仕舞ッて、外來の害を防ぐ所のもので又寒中は、寒さを保護する、其外塵や何かゝたからない樣に外から來るものを防ものでありますが、動もすれば外形に基ひて、衣服の制を不適當にし、或は又日本あどの風習で、暖かなが宜しいと云ふて、暖ため過ぎる。懷妊したからと云ふて汗を堪へて、厚着をする。是等は、最とも皮膚を緩めて、風を冒くの素因となります。薄着は、勿論注意しなければならぬが、要するに、衣服に就ては、別に述ることも無が、餘り緊迫に過ぎざる樣、餘り腹部を壓迫すれば、呼吸より腸胃の働きを妨げるに至ります。詰り程よい樣に致すが肝腎です。（未完）

○子供の養育　（其二）　クラ、ホイト子ー梶夫人　みどり譯

子供が若し嚴しき咳を爲すか、目の光り常よりも鋭どきか、頬の色いつもより赤きか、又は寢付たる頭より汗を出して枕を濕ほしなどせば、此れ皆な數多の不幸なる病氣の起るべき前兆なり。亦た僅かの不信實、一つの惡しき習慣等をも見逃し置かば、此等は他日其子のあはれなる又は恥づべき生涯の基ひとなるものあり、與や、彼の宜しからぬ相應しからぬ遊び相手は吾が愛すべき子供の罪なき魂しひを汚がすの病ひとなるべし。左れば、凡そ子供の躰だ、靈心、道德上などに

及ぼす病惡のきざし一つにてもあらば、直ちに之を見出さんとて、平生眞實に迅速に極めて鋭敏にてあらんとは實に母たるものゝ務めなるべし、夫故へ能く母親が申す如く「吾が兒は斯くも大きくなりし」などと言ひて自から慰むるとなく、吾が最愛の子供を凡そあらゆる所の病惡より悉とく保護したる迄は決して安心すまじきことゝなり。斯る務めを盡すは妾等が義務にして、母たるものゝ世に存ふるは必竟之が爲めにて候ふべし、而して妾等が斯る大いなる責任に當るは全世界に於て之よりも高尙に之よりも幸いなるとはあらじと思はる。故に母親はつねに用心して心得べし、今日は吾が子は同處にありしや、誰と共にありしや、其の樣姿は何如なりしやなど注意して、常に彼が心と魂しひと躰とを尤も十分に發達せしむるの場合を造るように心掛べきあり。又た吾が子は多くの子供等と同じく育ちたりとて滿足すると勿れ、更らに高く望み、最も良き理想を目的とすべし。尙ほ又舊くより敎へ來れる子供の育て方は宜しけれども、凡そ子供は皆なそれ〴〵に違ひたる取扱を受くべきものと覺悟し、必らずしも舊習に泥づみて美質の發達を妨たぐる勿れ、抑も子供を育つるはビスケットを造るとは異なる、何れも〳〵皆な一つの同じき型に入れて、是迄在り來りの形に製造すべきにはあらず、其子人々は皆な生きたる優しき愛兒なれば、皆な格別に相違したる性質をば稟け居るものなり、而して此の格別なる性質の育て方は、たゞ其性質に尤も深く尤も熱心に注意する所ろの母にのみ悟らるゝものならん。　一人の母、白す

○栗と柿　　もみぢ

庭前の柿果正に熟す、色赭らして花の如し、余れ之を落すに忍びず、戀視して徘徊すれば、烏ありカア〳〵と鳴いて、乍ち啄ばみ去る、喫驚してアット天を望めば、栗實身を投じて地に落ち、莞爾として愛敬の口を開く、然し餘り宜しからぬ御面相なり、植學博士云く、栗の刺あるは其樹下に落んが爲めなり、柿の色美なるは遠方に荷れれんが爲めなりと、然れども柿は王昭君と同に歎じて歌ふ、

胡角一聲霜后夢、漢宮萬里月前膓、
數行暗淚孤雲外、一點愁眉落月邊。

○一唱百歎

久方の天の惠に開くとは知らでや花の〳〵たりがほなる　(梧窓漫筆)
となふれば佛も我もなかりけり南無彌陀佛〳〵　(普明國師)
さめにけり五十の夢に見し〳〵や何に龍田のにしき三吉野の露　(資慶卿)
おもはじと思ふも物をおもふなり思へ〳〵とだに思へじや君　(消閑雜記)
世の中にちと我に似た人もがな生きて甲斐なき事を語らん　(太閤秀吉)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○男女交際論に於ける女學雜誌

女學雜誌は、其第百十二號より第百十五號に至る迄でに、男女交際の利害を論じ盡したり。然るに只だ其の利の存する所ろ害の伏する所ろを擧げたる迄にて、遂に理想的の交際方法を示さゞりしとて、所々より攻擊せらるゝものゝ如し、新婦人は初號早々此事に付き吾人を罵り、情の第一號は又もや此事に付て不平を述べたり。然し諸君は今日は女學子が交際式を說法すべき時なりや否やと一考せざる可らず、若し吾人をして極めて淡泊に白狀せしめば、今日の男女交際法は必要の限りぢりり〳〵と舊來の制度を改正し行くべし、敢て初めより禮式を製造すべきにあらざる也と言ん。蓋し男女別あるとを確認し、嚴に圖肉に流るゝを禁じ、

"Dearest Bond is this …… Not like to like, but like in difference."

最愛の交わりは異性中の同交にあるの元則に據るは、之れ豈に道理に適し、人情に適し、高尙なる道德に適するの心得にあらずや。懷劍帯間にあり、席を隔てゝ肅然として語る昔しの日本の女德決して棄つべきにあらざる也。

此花紅南所無也一枝於折盛之盛者、任天
永紅葉之例伎一枝可剪一指。
余は一枝の切らるゝは一指を切らるゝ如く思ふべし。

○邪推と流言　　足空子

私しの女友が慨歎したです、申しますには、成程女には邪推とやらが多いでせう、お末さんが京都見物に居らつしやると、アレは切度何々さんのお蔭で、大丈夫約束が出來たからお金も出たんですナドと云ふともあります。お文さんが貞女を立てゝ、妾わは最早や浮世に關はり侍らずと發心して御隠居遊ばしても、アレは内々二度の嫁入仕度で、お倉に時々外へ脫けて出なさるでは無いかと云ふともあり。お德さんが少こし黎さんと話しでもすると、切度くさいよなどッチ評判するんですもの。潔白な女學さんが、一寸と奥さんとお三どんの事を言たつて、中々油斷のならん離間策をすると言ふて怒るともありませう。まして、お藤さんがヤレ〳〵と騷いで仲直りの周旋を爲さるのは、アレはホンの其加減で奥向に立入りたい迄の心ジヤと申しますともあり。才子さんなんザア、同じ友達の出世で言はゝお國の勢ひが附いたと云ふ筈だのに、保養にかこつけてお出かけなすつたのは、切度自分に錦の廻らなかつたを怒つたんですよなどゝは、隨分女の仲間で云ひますとて、夫で女には邪推が多いの、ヤレ氣が小さいのト、さん〴〵惡口を言はれるのですが、殿方の中でも流言と云ふと

がありますでは無いか、女は内を守るホームの女王だと定まつたら、小さい所ろで夫々と流言するは尤もの事で、殿方が外に働らき乍ら大仕掛の邪推を爲さると何の變つたことがありませう、何に女に計り邪推があると言はれる道理はありません」、と箇樣に申されましたデス。

○神、家、仁愛

ウイラード女史述
Y. N. 生譯

敬愛なる姉妹及兄弟よ各地に勃起したる諸の矯風會に萬國婦人矯風會は連合すべしとの議出てより既でに五十年を經過したり我米國婦人矯風會にて連合するの利なることを熱心に贊成したり回顧すればメリイ、クリイメン、リビット女史ハ單身海山千里の行旅に上り世の婦人をして純正温良の風を養成せしめんことを期し先大平洋の海岸より布哇壞太利亞を經て日本支那及び印度に航し拮据勉勞少しも其痛苦を辭せず至る處の地方に於て支會を組織し及び人類の腦髓を毒害する酒類通商禁止の請願書を分與したり女史今や錫蘭島にあり次てマダガスカルや喜望峰へ巡航すべしと亦英國のチヤロツト、グレー女史は歐羅巴大陸にメリイ、ビイ、ウ井ラード女史ドクトルスタツキン、バーク女史の兩氏は伯林にミージヤーヘルム女史は瑞典にカリホルニヤ州のジフシー、エ、カアマン夫人はアラスカ州に滯留し皆吾人の爲めに大に盡力せらる斯の如く諸氏は奔走の勞を取りて少しも怠らず吾人は此等諸氏なくんば何事をも爲す能はさるなり豈亦諸氏の勞を謝せざるべけんや亦萬國婦人矯風會の連合に付てはハンナ、ウ井ツトル、スミツス女史の盡力に因る亦大英國矯風會の姉妹が進んで之に力を盡さるゝこととなれり又マガレツト、ブライト、ルーカス女史歲七十にて千八百八十六年ミンナポリスの年會に於て其地氏人と加奈多姉妹と吾人とが將來の運動を共にし親密なる交際を結ぶまでは萬國婦人矯風會の連合は未だ鞏固ならざりきマガレツト、ビイ、ルーカス女史が其偉勲に因りて得たる所の燦然たる桂葉の花冠は蓋し萬國婦人矯風會の第一の會頭たる地位に撰任せられたるを見て之を知るべし況んや女史が天性の優愛は如何なる時機如何なる場合に於ても若し其要あらば吾人を補助することを決して忘れざるの人なるをや女史は英國と加奈多の兩會の連合せしことに關して能く之を保護翼贊したり故に此兩會が既に結びたる訂盟に對しては彼等の自ら棄て自ら破るが如きことなきは斷じて之れなしと信ずるなり本會規定の條款に因りて余はルーカス女史に襲で萬國婦人矯風會の會頭の地位に撰任されたるも余の不肖なる女史の有爲の才と溫雅なる性質の一部分だに余の有せざる處なり故に余が同會の宏大なる希圖に對して滿足を與ふる能はざるや必せり。新任の書記なるヲハイヲ州ラベンナのメリー、エ、ウツドブリツヂ孃及び他に一人余が加奈多より適當なりと認めて撰任すべき書記官の補助に因り希くは以て余の今日の地位を保ん幾分の進歩をなし得べきかブライト、ルーカス女史が會頭たりしに當時ゼユニヲンシグナル雜誌を萬國婦人矯風會の機關と爲さんとの請求に對しては左の如く言ひたることあり曰く或る事柄に付きての機具たるゼユニヲンシグナル雜誌に反對することあらば何事に拘はらず余は是に答辯すべしと抑もゼユニヲンシグナル雜誌が創立の當初より通信報告の機具となりて中央局より四方に向て報道をなし又リビット女史が便勁なる筆頭を以てしたる文章を掲載せり故に此雜誌は既に實際上永く其樞機に當り吾人が運動を補助したるや知るべし而して余は尙ほ希望すメリイ、エ、ウツドブリツヂ女史が此萬國婦人矯風會の主義を奉じて大英國及び大陸を巡航せられんことを亦同會の大會は永久英國ロンドン府に於て開かざるべからず倫敦は世界の都府とも稱すへき所にして該地の英國矯風會より吾人姉妹が招待されたることあればなり。

リビット女史歸米せらるゝ時は余は女史を以てシカゴ本部の會頭となすべし而して本會の規則報告等に關する一切の事件は勿論余が補助となすべき者は皆其會より送達すべしイリノイス州イヴアンストンのアリスブリツグ孃は萬國婦人矯風會本部の書記なれば社會の大勢を觀察し一層の斡旋を希ふブリツク孃は既に數年間其職にある者なれば其充分なる責任を盡さるゝは余が信じて疑はざる所なり。○○終に臨んで別に各位の注意を願ふこと四あり第一凡そ人躰上活潑を致すか持長に關るゝかとの問題に至りては諸學校に於て躰操術の成果如何にありとのことも其原因は全く余が稱道する攝生の一にありとの事漸く世上の信する所となり今は此攝生の教育も世人が熱心なる待遇を得るの機運に到着したり然れば彼のメリー、エツチ、ハント女史の如きも舊來の陋習を去て爾來吾人か贊助あらんことを望む第二酒類通商禁止の請願書は固と世上一般に普及せざるべからざる者なるにも係らず吾人が本會を組織してより吾人が重要する事業の十分一をも達せざることなれば吾人も是より益々他に禁酒を主とし慈惠に富む諸會員を集め之が協力を得ざるべからず故に吾人は是より先吾人が會則等を他の諸會に送り以て贊成を乞はんとす其會則の謄本は英國ロンドン府ウエストミンスター區グレスバナア通り四十番メリー、ブリツグ孃の說明に因りて明瞭なり第三吾が此婦人矯風會は年々會員より集金は五仙なりと雖ども英國は二「ペンス」を集金すと聞く吾人は其集金は實際要する處の金額は幾何なるやを知らんことを求む諸國諸州各地方と共に此禁酒主義を擴張せしむるの勞働に要する處の費金は固より出金すべしとシカゴ府ラ、サル街百六十一番會計タスターポー孃に通知せは精密なる調査を爲すべきなり第四毎年大會にて集金する金圓は地方部と萬國婦人矯風會本部の資金として平均に分配せりと其會集の日は本年は十月十四日の日曜日なれば各地の牧師は禁酒に關する教示を其會員に與へ併せて茲に要する如くの費金を徵集し尙幼童に至る迄其禁酒會に臨ましめよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

以上の說明によりて余が著述の「學理上禁酒教育」と「社會及び婦人社會に付て新定說」と題する論文は各雜誌に揭載すべければ庶幾くは發行の日は一は吾同意者の公義心を深からしめ二には未だ吾人と主義を同ふせざる婦人をして幾分の感を生せしむるに足らんことを希望す。

不肖余が陳述する處にして若も社會の信認を得其希望する處企圖する處にして單純潔白能く人情の止み難き競爭を以て各地に普及し皆な督及び矯風運動の世界たらしめば余豈に之を祝賀せざるを得んや諸子之を諒せよ。

小說

○さすがに双紙　第九篇　美妙齋主人

夢を目的にした躰ではさすがに大人氣もありませんから、それと無い躰で或は神奈川邊に栗殼は居は爲ないかといふ趣を遂に時子の父親も其筋へ願出しました。　はかないことにも萬一と思ふ、これ一つでも父子が花房の事を苦勞にして居ることが分解ります。

次日其筋へ出て（實に默つて待つて居られませんから）父親は神奈川の事を尋ねますと、其掛の人の言ふには直に昨日神奈川へ電報で照會したけれども、そンな名の者は無いといふ返辭が來たといふことです。

幾分か依因を置いた處も全で違つて仕舞つた、その結果を聞く時子のかなしさ、或は父親が噓でも吐いて居るのでは無いかと思ふほどです」。

「本當に左樣ですか、阿父さん」。

「本當さ。　また、夢が何の目的になるもンかね」。

「ぢやア貴下も最う何んですね、あの、栗殼さんは死んだ」……「と思れないにもしろ、今の處仕方が無いや」。

今更父親さへ憎いやうに思はれます。　今更其筋の返答さへ疑がはしく思はれます。　「あンまり阿父さんも甲斐が無いな。　あンまり其筋でも不深切だな。　なに、たつた僅の時間で電報で應答したつて……人……よく探

させても見ないで」。

心の内でつぶやけば又心を放つて思案の郷に遊ばせたく為ります。自分の居間へ歸れば生憎に花房の持物が目に注いて目に注いて、いッそ身の側にそンな物が無かッたらとまで愚痴を言はせる程です。

どう思直して見ても念ばらしに神奈川に栗殼が居るか居ぬかを尋ねないでは居られません。それも、たゞ一人の頼みとする父親に謀る譯には行かず、今のところ別に頼んで探して貰へる人も無く、時子自身が行ッて尋ねるより外に仕方はありません。考へて來れば矢も楯もたまらず、直に新聞紙を取上げて滊車の出發時間を…見は見ましたが、今日東京を出發したにもしろ、少くも一夜ぐらゐは神奈川で過ぐさなければ為らぬといふ不便もあります。婦人が一人旅、それさへ心細い事ですのに、まして外泊するなどゝいふ事は…いや是も空中樓閣の考とありさうです。

が、さすが又壞悉くすのを好みません、更に從前の糸筋を手繰寄せてはふたゝび餘命のまだ熾な情思の炎を煽動します今日といふ今日このごろは如何なる惡日か、むしろその惡日は早く過行くやうにとて願ひますが、さて又何處やら一時間でも惜しいやうです。

夜は平常にかはらぬ凄まじい妖魔の暗闇を垂れて…有難いか、忌々しいか…物思をまさせる材料をこしらへます。見れば天の星、それも闇に逢つてはじめて光を現します。見ればわが部屋の掛額、それも嵐に狂ふ夜船の圖で一葉の薄さを支へて行く筋骨は池の稽古では迚も思當らないとです。勇氣、婦人の勇氣、平常やさしい象の鼻も怒れば犀を挫ぎましやう。欝勃して居たのゝあらはれたのはむしろ現はれたのが現はれるのより度は強いものです。

「いまに阿父さんが御休みなさつたら拔出して直滊車に乘つて行かうや。心細いとは言ふものゝ何、この身は非道の事をも為たことは一度も無い、何がこはい事があるものか。守つて下さるものが、なに、無いことが有るもンか。無かつたにしたところが…いや、有る。こはいことは無い。が、しかし左樣してはる〴〵神奈川へ行つて尋ねてそれで栗殼が居たらよし、もし居なかつたら…あア何うしやう、さうすれば笑はれるばかり…では行くまいか知らむ。行かない方が宜さゝうだ。」

けれど、どうしても…

「宜さうだ……理窟は左樣だけれども、この心、心が、それでは滿足しないから……それで、また……いや考れば、神奈川と……え丶と、栗殼と、居てくれれば宜いが、多分は居さうに思はれるけれど。　居るか知らん。　居ないか知らん。」

居るとも居ぬとも實はわかりません。　今更利發な心にも或はもし卜筮でも問ふて見やうかと迷出すこともあります。

無論信ぜず、それながら座の側の洋書を取上げ、

「子音の字がはじめに出たら居る。　母音が出たら居ぬ。」

念じて暫時試して見て、さて馬鹿々々しいと我身で我身を笑ッて更にまた元の考を呼起して居る内に不圖目は座敷の時計へ向ひました。

「おや、もウ、十時過ぎ。　阿父さんはまだ御休みあさらず、その中に汽車は出なくなる……あゝ、ま、どう爲やう。」

青い呼吸を吐いて居るうちに父親から掛聲がありました。

「阿時。」

「はイ。」言ひながら座を立ッて父親の座敷へ行きます。

「もウ寐たら宜からう。」

「へッ？　はイ、あの貴下は。」

「私か。　私は些と用が有るから御前さきへ寐るがいゝ。」

何處やら寐ないと身體に毒だといふ意味を含んだ顏色です。　それを嬉しく思ふと同時、また父親が永く起きて居るらしいので當惑しました。

「何か、御前も何か有るのか、用が。」

「いえ、別に。」　ただ〳〵して居ます。

「そンなら何も、」　父はすこし嚴格です、「そンなら起きて居る事は無い。　御寐。　寐ていゝよ。」

急立てられて仕方なく承知して歸らうとすると、父はまた何やら引留顏です。　言はうか言ふまいかと思ッて居る樣子ですから時子も一寸心が殘り、立切らずに床へ行ッて花活の花を無心でいぢッてそれと無く出て來る聲を待ッて居ます。

「阿時、」　思切ッたらしい聲です、「花房さんは今拘留中脚氣が大層起ッたさうだが」……

「そりや、ま、」　醫者でも無いものを醫者あつかひ、「どうして、貴下。」

重々の究厄には父子が顏へ隧道を開けて居ます。

柔而凝って女性と爲る、其氣散ぜざるの香、其音は無聲の琴、其言は天使の語、其涙は天國の露、薔薇香あり、櫻花落ちず、玉露散ぜず、滿月缺らず、自然の美粹結晶す焉。　女學子

○哲女の卷（第六回）　夢浮橋（下）　月の舍忍

朝たには本來の悪人も尚は心清むと云へり、況してや純清潔白なる好孃の如きが、平生神の如くに崇拜する最愛の父の傍はらに侍べり、而も靜雅閑邃の僻地に餘念なく遊びて何にの憂き事も思はざるに當りては、茲に旭日の快よく東天に登りたる時其心地は天に住ふよりも尚ほ樂しかるべし、心氣快然として、たゞ何となくうれしければ、宿の婢にも任せず、手づから早く室内を掃除し、今しも父の着替を調ふる折柄、偶と細かに疊みたる新聞紙の傍はらにあるに氣附き、取上て廣ろげ伸ばしつゝ、吾ともなく舊知己の文字が眼に觸れたるを感じ、驚ろきて更らに注視すれば、

○四條哲孃と秦無極　昨日の雜報にも記るしたる彼の四條哲孃はいよ〳〵青山剛氏方に引移られたるよしにて病氣も漸次快方に趣むくと云へり夫に付ても秦無極氏の行衛今に相分らず或は兼ての志願もありしなれば其日直ちに北海道へ奔りたるならんと云ふもあれども現に其が一女は西京高志社に入學あるところ過日其の父と覺しきもの同校に至りて之を連出したりとも評判して大方之を伴なひ西國に奔りたらんなど申し合へり然るに同氏に關する嫌疑は啻に昨日記るしたるのみにてはなく大坂堂島の仲買坂本忠七氏頓死に付きて何か餘程の疑はしき箇條相分りたる趣きにて昨朝大坂警察署より問合せの廉あり直樣東京警視廳より全國へ向け電命の件ありしとか風評して目下種々の取沙汰あり然し兼て隱君子を以て任じたる秦氏が一米商の疑死に付きて疑はるゝと云へるは少しく意外の趣きあれども現に此の隱君子が彼の坂本忠七氏を使つて相場に手を出し大失敗の取繕ろひに窮して四條家の財産を濫用し盡したるとは今日既でに略ぼ明瞭の證跡もあるとなれば此は必しも左程に喫驚すべき推察にあらずと知るべし然し何れにもせよ近來の一怪報にして甚はだ聞棄がたき事件なれば更らに探報の上追て精はしく記するとあるべし。

一讀茫然として夢の如し、左るにても如何にして吾が父に斯る事のあるべきぞ、邪推も程こそあれ、失敬なる新聞紙粗漏も程こそあれ、ナゼ父さまは之を默つてお出なさるか、何故之をお辨じなさらぬか、ナゼ私しにも話して下さらぬか、エヽ虛言を言ふにも程こそあれ、ナニ毎日新聞、此の新聞は一番正直な新聞だと思ふたに何故このやうな虛言をかくか、左るにても昨晩お父さまが大層厭なお顏附であつたは此の事で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

したか、何とも仰しやらずお怒りもなさらなかつたは、餘りお心が善すぎます、然し亦た私しに心配させまいと思召しての事でしたか、チヽ有がたき父さま父さま父さま…・

靜かに障子を開らき、片手に齒みがき楊子と手拭とを提げて優々と入り來りたる父を見るより、好は馳せ寄り彼の新聞紙を見せて、泣伏したり、

アノウ、ア、是かへ何んだか詰らん事を書いてノウ。

好は起上りて父の面てを眞直に見凝め、

お父さま、コンナ失敬な事を書かせて其儘にお措なさるとも御座いますまい、第一警察署にどうとかと迄で御座いますから、早く此所の分署にでもお出なさつてお辨じ遊はしたら宜しう御座いませんか。

無極は急に後ろの方を見て、扨て甚れた沈着らしく、

ソウサ、然し實に詰らんことじや、ダガお前萬一にも己が居なくなつたらどうするか、エー。

好は不審し氣に父の面てを見たり、時よドヤ〳〵と人の來る足音して「ヘエ〳〵之で御座います」との亭主の聲音に、障子スラリと開らかれ、只見る警部一人巡査二人靴のまゝにて現はれたり。

警部は室内を見廻わし、二人の客に注目し、殊に彼の無極に目を留め乍ら、亭主を後目に見たれば、亭主恐る〳〵

ヘエ〳〵秦無極さまと仰しやいますのが、即はち之で御座いまして、其方にお出なさるがお孃さまの、エーナニ、好ヘエ〳〵お好さまと仰しやいますので、何で御座います、一昨日の夕方にお着なさりまして、何も別段にヘエ〳〵

警部は嚴めしく無極の前に突立つたり、無極は兩手を膝に載せ嚴然として座わりたり、好は父の後ろよりして息氣を殺して窺がひ居る、

アナタが秦無極君と云はるゝのか。

如何にも左樣で御座りまするが、何等の御用にて。

嫌疑の次第あつて逮捕いたす。

心得ぬことを伺がひまする、身に何等の覺えも御座りませんものが、何しに。

秦氏卑怯を申さるゝな、此期に及んで見苦しきは不面目の極で御座らう。

如何にも卑怯は申しませぬ。何等の罪狀ありとお見留めに成りましての逮捕か、夫が伺ひたく。

固より斯く逮捕狀は持參いたす、罪狀は分署に於て申すと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あれども聞たくばお話せう、第一四條家財産奪掠詐僞取財の事、第二四條哲教育上人命誅殺の事、第三坂本忠七誅殺の事。

成程、悉皆覺えは御座りませぬが、逮捕狀御所持とあらば速かに參るで御座らう、奏無極決して逃かくれは致さぬ、只暫時の用意に御暇まを戴きたい。

見れば令孃御同伴の旅中、定めし不自由が御座らう、寛りと用意なされい。

有がたう存じまする、コレ／＼好、右ようの次第、ナニ一寸と參つて辨じたらば分るであらうが、羽織を取つて呉れエ、シテ其革袋の中に神藥があるはづ、少々

好は憐れむべし何事とも知らず、言わるゝまゝ／＼革袋を開らきて神藥とか云へる一瓶の藥を取出し、其儘に掛念の手先を震わして父に差出せば・・・・

失禮いたしまする、昨日來、切りに腹痛いたしまして、困り入まする。

と獨語しつゝ瓶中の水藥をぐつと一飮したり、暫らく無言なり、好は淚を浮めてチット父の樣姿を窺ふとき、父は倘ほ無言なり、警部は漸やく聲を掛けて、

宜しう御座るか。

ハイ、何卒今暫時。

然し餘りに時過ては・・・・宜しからず、サお立あれ。

ハイ、ハアイ。

父は膝を壓して立上りたり。巡査二人は后ろなりに外に出でたり、警部は注意し乍ら早や先んじて進まんとせり、

モシ、お父さま。

ヲッ。(バタリ、身は屈倒したり)。

お父さま、どうぞ御丈夫になさつて。

ヲ、、ヲ、。

好はつか／＼と警部の傍らに來り、謹んで首らを下げ、

父は御覽の如く甚だ腹痛の樣子で御座りますれば、今暫時御猶豫を願われませまいか。

左程でも無きようす、適ひますまい。

左樣ならば御分署まで私しが附添ひましては。

夫も宜しくあるまい。

父はアット一聲高くうめき出せり、好は半狂亂飛び返つて之を見れば、顏色土の如く、四肢痙攣し、嚙切りたる唇より鮮血流れ出せり、驚ろく警部巡査亭主よりも好は殆んど狂へる

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

が如く、

お父さま、お父さま、如何なさりまして、モシお父さま。

目は見張れども唇は開かず、胸邊の動悸波濤の打寄する如く、四苦八痛の趣き名狀しがたく、手を出して好の手を握り、もだえ苦しむ、哮つて聲を發する時血はダラ／＼、

ソレ、竹井、醫師を呼べ、亭主、氷を持て。

無極は畢生の聲を鳴らし、

アヽ諸君、もはやお搆ひ下さるな、切ては己が愛兒好の膝に於て相ひ果て申す。

日は既でに高けれども光暴れり、好が愛情は遂に命の催くるを防ぐあたはず。

佳傳

○萬國婦人傑　酒會々頭　ウイルラルド女史

右傳の續稿は餘白なきに付次號に相揭ぐべし。

○息君夫人

息のきみの夫人なり楚は息をうち破り其君をとりこにして其門をまもらしむ又其夫人をとりて妻にせんとて宮中にいれをきぬ、楚王遊びに出たりけるひまに夫人密かに宮中を出でゝ息のきみに忍びやかに見ゑていふやう人の世にあるにをそくとく遂にながらへ果べからず妾は露の間も君を忘れねば親から更に人に心を合れすと今迄は夢へべらず斯くて分れてあり遂に心ともなき憂目を見んも知るまじき世なりければたゞいち早く身まかりつゝ斯る憂き有樣に立はかれたしとなんをもふと云ひて詩つくりて云く、

穀則異室、死則同穴、有如不信、死如如噭日。

といへりければ息の君のいふやう假令ひ斯く立ち離るとも心だに變る可らずば何か異なるとあるべきたゞ身を全し玉へかしと切つに止め聞けれど夫人遂に聞入れずしてやがて自ら失にければ息君も共に自害して枕をならべ侍りき、楚王物よりかへりて此ありさまを見きゝつゝ彼夫人の節を守り義あるとをめで聞えて諸侯の禮をもちて二人ながらを合せ葬ぬとぞ。

女學子云く、メンと云ふもの甚だ面白し、之を能に用ひて演劇に用ひざる所に注意すべし蓋し昔日は人一々眞面に粧ふを得ず又夫程にせずとも大抵にて人は恕したり、例へば能の女形と演劇の立お山との相違の如し、總じて昔は皆この類なり、西洋にても眞を粧はひ飾るをベール(假面を冠る)すると云ひて面をつくると云はず、昔は叉面を冠りたるを知るべし。嗚呼初めは假面を冠り次に眞面を粧ひ末には粧へずして似たるものを用ゆる也(即ち女役は女つとむ)。

寄書

○文苑　　鈴木弘恭大人撰

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

暮秋月
なかめやる月の光はかはらねどことしも秋はくれてゆくなり　伊集院孝子

同
くれてゆく秋の夕べのさびしさは月影ならでとふひともなし　原　安子

同
よしの川くれゆく秋の月かげはしがらみさへも止めかねけん　片岡きみ子

同
くれてゆく秋のかたみの大空になほ殘りたるありあけのつき　浦　早苗子

同
有明の月かげほそくなりにけりこよひやあきの別れなるらん　跡見もと子

野草花
なほさりに道もゆかれず秋の野はを花くす花さきみたれつゝ　太田きん子

同
秋の野の千草のなかの女郎花つゆおもげにも咲きみたれけり　土屋ため子

萩
吹風にこぼれそめたる秋萩のはなはつゆさへあはれなりけり　中澤鹿衛子

寄菊祝
幾千代も君こうかざせ秋ことにひさしくにほふ白きくのはな　三條　富子

寄菊祝
いく秋もいろうるはしく咲く菊を千代のかざしに君に進めん　大谷　惠子

○大坂一致女學校開校祝文　生徒　大河ぬひ子

かしこくも救ひの神の我國をして文明に導き女子教養の道をたどらせたまはん神の慈仁のみこゝろをうけて新に一致女學校をこゝろ清くも清堀村に築かれてけふは開校式を行はせたまひわらはもをしへ子の末位に列なれるはうれしき事になんそもく學校なるものは百の事業をなすの基なれば之に學ずしては他に智徳を研くのすべなかるべしうれ有機の靈物も教導を加へざれば賢哲とならず無機の鑛石も琢磨を加へざれば金玉となるのことはりなしとかやされはわらは愚鈍なりと雖ども神の御惠みを蒙りて勉め學ばゝ成るところあらんかし依て顧ふエホバを畏るゝの畏れは智惠の始めなりと不肖のわらはこの御詞をかしこみてこゝに開校を祝し奉りぬ。

同校のあらたになれるをことほぎて　在大坂　渡邊弘人
みがきなす此學舍に色そへてまことの道をてらせ乙女子

新報　（此欄内自由に轉載を許す）

○宮廷錄事

九月三十日御降誕在せられし皇女昌子内親王常宮には至て御壯健の由にて去る一日は賢所御參拜の爲め宮中へ成せられ夫より聖上皇后宮へ御對顏在せ給ひし趣に承る。

○皇后陛下の聖德、赤十字社の事

去る二十六日午後三時より赤十字社病院に於て萬國赤十字社創立第二十五年紀の祝典あり　皇后陛下行啓仰せ出されて忝けなくも式塲に臨ませられ、左の令旨を朗讀遊ばされたり、

本日は赤十字社設立より二十五年紀にあたれるを以てこゝに祝典を擧行するは予も亦欣喜の至りに堪へず將來本社の益盛大ならんことを望む

右終りて小松宮總裁は御前に進みて答辭を呈し、次に佐野社長は祝詞を朗讀あり。當日　皇后陛下は祝酒料として金五百圓及び赤十字社病院へ八萬圓を下賜せらる。本年十月五日　兩陛下より赤十字社の維持資金として十萬圓の下賜あり今また如此き恩賜ありたるを承はる、陛下の聖德至れる哉、陛下は夙とに養蠶塲を設けしめて華族惣躰の婦女方に製糸紡織の女工を勸め玉ひ、亦た慈惠醫院を看護の下に置かせられて毎度行啓恩賜あり、尙ほ此の博愛なる赤十字社の爲に斯く迄で御心を掛させ玉ふと承はりては、吾人恭謝の涙に禁ずるあたはず、吾國の姉妹等誰んで此の聖德を奉躰せざる可らず。因て同日の答辭祝文等は諸新聞紙に出たれば畧す、たゞ其折の祝歌（萬國赤十字社創立二十五年紀祝歌）を得たれば左に揭ぐ、

國をおもふも　ひとのみち　人をめぐむも　ひとのみち
みちをふむにも　道あれば　よるへきみちを　もとむべし
國と國との　まじはりは　信義をもとゝ　たつれども
事ある時に　のぞみての　たのみハ軍人　兵士なり
國のまもりの　軍人の　いたでになやむを　すくふこそ
めぐみのうちの　めぐみにて　たれもふむへき　人のみち
赤十字社の　發起より　二十五年の　其うちに
かく盛大に　なりぬるは　神のめぐみも　さうならん
これをいはひて　あまつ日の　てらすかぎりの　國びとは
もるゝくまなく　人のみち　つくさんことを　いのるなり

○赤十字社有功章

又同日同社の有功章を附與せられたる方々は左の如し、
一品熾仁親王殿下、同御息所、二品彰仁親王殿下、同御息所、伯爵伊藤博文、同山

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

縣有朋、同西郷從道、同大山巖、子爵土方久元、同佐野常民、同大給恒、橋本綱常、石黒忠悳、子爵櫻井忠興、同松平乘承、澁見久藏、岩崎彌之助、岩崎久彌、西村虎四郎、三井高保、笠野吉二郎、茂木惣兵衛、箕田長二郎、大谷嘉兵衛、中川又三郎、原六郎、原善三郎、平沼專藏。

有功章を受られたる方々二十八名、此中女性は僅かに二名なり、吾人は固より有功章を受る人々の成るべく多かるほどに諸人の盡力あらんとを希ふ勿論なれども、上み　皇后陛下の御思召を體して、日本の女性中に更らに多く有功章の婦人綬を受らるゝ方の多からんとを切望す。(婦人の綬の形圖は前號に出し置たり)。

〇日本國の女數

内務省に於て調査せる昨二十年十二月三十一日現在の諸取調によれば

戸數　七百七萬九百五十六戸(ホームは何軒ありや)

人口、三千九百六萬九千七人

内	男	一九七三、一三五四
	女	一九三三、七六五三

扨て男よりも女の數の多き縣々へ、左の如し、

京都、大坂、長崎、新潟、埼玉、群馬、愛知、山梨、滋賀、福井、石川、熊本、鹿兒島、沖繩。

又配偶の有無を見るに

	(人)
配偶數	一四六九、二四四八
無配偶	二四三七、四二八二
此内 男	一二三八、三九二二
此内 女	一一九九、〇三六〇

之は必しもヤモメとミスと男ヤモメなどの多きゆゑにあらず未だ年齢に達せぬ若年の多きゆへなるが、其の未だ結婚せぬ若手の數について云はゞ男の數は女よりも多し、即ち男は競爭淘汰して女の愛を引ねば成らぬ運に居る也。」扨又、無籍在監の數を比較すれば、

男	女
一一五五	七〇〇

女に惡人の少なきを知るべし。又結婚離婚の數は、昨年中に、

結婚	三三、三八七三(人)
離婚	一一、〇七六九(人)

三軒で高砂を歌へば、一軒は盆の水を覆へす、さて〳〵之丈けは忌へしきと也。

〇京濱婦人大祈禱會

去二十七日、築地新榮會堂に於て、秋期の京濱婦人大祈禱會を開かれたり、而して日本全國を徴し日を同ふして所々に祈禱せられたる婦人又莫大なるべし、此會の會ごとに彌よ隆盛を極むるは、基督教徒一般婦人の大運動に於て、尤も慶賀すべきものなり。

〇かみきり

其後は別に新たなる騒ぎりあるを聞かず、大學醫院に於て佐々木教授が試驗中のよしは前號にも記し置たるが、其後同教授は當人が自から斷切するにあらずやとの疑を生じ、特に二重の繃帶を頭に包みて其髮を被はせたるにも係らず、猶ほ元の如く切れ去るよし也、而して當人は子宮病をも患ひ居れば或は其姿の關係あるやは知らず近日の所ろにては未だ病元の明らかならざるよし也。然し繃帶にて包むに猶ほ切れ去ると云へば、先づ當人が斷ち切らざるを明白となれる一也、御心配の如く狐狸や惡漢等の所爲にもあらざるを明白となれり、此の第二の事跡について御安心の方もあるべし。

〇上流婦人當今の衣服

此頃ろ府下の大丸越後屋等へ注文ある上流婦人來客のお召は、大抵日本服にして洋服は一向になしと云へり、成程鹿鳴館に催促せられて洋服をお着け遊ばしたる方々は、舞踏の宴散と共に其必要を滅して日本服に立返り玉ふは尤もの事なり、但し此頃ろ又々舞踏復活の擧樣ありとて注文に御掛念あるならば、夫は頓と御心配なきがよし、斯る流行に復活されて困まるはアナタ方斗りならず、我等の怨み丈でも消ね失せ申せじ也。

〇婦人獨逸語研究會　同會の事は前號の廣告中にも見へたるが其申合規則中の主なる條目は左の如し

婦人獨逸語研究會申合規則

第一條　本會ノ教授ハ專ラ獨逸婦人ノ執ルトコロニシテ日本人之ヲ補助ス

第二條　本會ハ獨逸語(素讀、習字、文法、會話)手仕事、裁縫及ビ望ノ御方ニ音樂ヲ教ユ尤モ將來ハ英語ノモ授クベシ

第三條　本會ハ毎月育兒、家政、教育婦人ニ關スル有益ノ談話ヲナシ會員ノ朋友ヲ伴フヲ許ス

第四條　課業時間ハ毎週月、火、木、金午前九時ヨリ十二時ニ至ル十二時間ニシテ獨逸語六時間手仕事三時間裁縫三時間トス

第八條　本會ニ入ラント欲スル御方ハ滿十四年ニ達シタル者タルベシ

入會ヲ望ム御方ハ左ノ婦人ニ御申込アルベシ

麹町區富士見町二丁目二番地	小松原
本郷弓町二丁目二十番地	丹波
市ケ谷加賀町二丁目十番地	柴田

横濱山手二百十二番女學校及び東京六番町櫻井女學校等に於ては先頃ろより獨逸學の設けあるよしなるか今又た如此き研究會出來たれば女學の區域は殆ど英佛獨の三國語に擴まりたり。

〇青山英和學校内女學校　府下青山英和學校内に新築ありたる女學校は築地十三番女學校内の高等科を別にせられたるものにてアワキンソン孃姉妹及びソパーンス孃其の教授に任じ生徒は當今三十人あるよしなり。

〇櫻井女學校　府下の同女學校に於ては此度篤志にして學資金なきもの〻爲めに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

別科を設け半日洋服の裁縫に從事して若干の賃金を取り其を學資として修業するの方法を立られたるよしなり加藤勝彌氏の母君其取締と爲りバラ孃英語教師と爲り生徒は當今十三四名ある由に承はる結構の教育法と云ふべし。

○フエリス英和女學校文學會　昨夜午后七時より開會あり。會頭島田かし英語歡迎の辭、英詩朗讀(片山猪江)演說アルマヽーターの愛(佐藤折)英文朗讀(星野光)和文朗讀(青山都)和文朗讀(石井かめ)英詩暗誦(長谷川みね)演說智者に一言(松田道)邦語對話等ありたり。

○明治女學校紀念會　明治女學校内に文辭演說を學ぶ文學會と作工慈善を主とするマリアの友と云ふあり兩會の發起にて校舍新築の一週紀年會をば今日開かるゝ由也。

○成立學舍女子部　同部にも自得會と云へる會あり去々月三十日に初會を開きたるが今月亦た其の秋季大會を催うさるゝよしなり。

○大坂一致女學校開校式　同校は愈よ新築落成にて去月十三日開校式を執行せり今其の概況を聞くに新詩讚美を以て會を開き夫より演說、祝文朗讀、唱歌、陸軍樂隊の奏樂等ありて頗る盛會なりし由又來賓には兒島大坂控訴院長、牧野陸軍大佐、建野府知事及び今井書記官の兩夫人より郡區長、府會議員、新聞記者其他内外の紳士貴女無慮二百餘名なりしが兒島控訴院長外十數名は感ずる所ありとて校費として若干圓を寄附せられたりと云ふ。

○號報　今日午后二時より厚生館に津田仙星野光多兩氏の婦人慈風會演說あり會場費五錢の由○來る廿三日本鄕壹岐大成會堂にてスピンチル氏の最良の婦人とは何如の演述ある由○都の花第二號には秋月女史とか云へる人の新作小說出づべし。

外報

(此欄内自由に轉載を許す)

○日本皇后陛下　同陛下は當今尤も智識ある女性の一人と爲り玉わんとす即はち當今陛下は日耳曼語、羅士亞語、佛蘭西語、伊太利語、等を御稽古中なり(九月廿二日ウーマンス、ジヨウナル)

○陸奥宗光令孃　新來の日本公使陸奥宗光氏ワシントンに到着あり、其の令孃は甚はだ美しき女子なりと聞く、ワシントンの交際社會は日本佳人に於て一個の新奇を増したり(グーデース、レデー、ブツク十月分)。

○クレーク夫人　去年死去ありたる元のミウロツク孃即はちクレーク夫人の爲にチウケスベリーに紀念碑を建んとの計畫あるよし、然し夫人の最良の紀念碑はジヨンハリフハツクスにこそ候ふべし。

○裁縫女工　米國ボストン府及び其近邊丈にて裁縫を職とする女二千七百人あり此等の者今度會合して新英裁縫附會と云へるものを造りたり。

○米國ウエルスレー女子大學　今年新入の女生徒百九十五人あり其他は塾舍の都合ありて入學を許されざりしが之にて現今同校丈にて七百名の大學女生あるに至れり。

小供談

○羨やむならば大きく望め

前號のお談しと同じ樣な事ですが或る時綿羊も亦たつらつらと自分の事を考へました、ワシ程人に可愛がらるゝものはありますまい歌よみには賞られ詩人には吟ぜられお姫さまにも殿方にも慕わるゝと云ふは何たる幸わひだらう、然し何分余り溫和しうして居る者だから兎角狼などに痛められて困る、牛の樣な角が欲しひナア(イヤイヤ然しそうすると丸で山羊だと思はれるから忌だ)大きな牙を貰つて一つ恐ろしい顏付をしたいナア(イヤイヤ夫では虎の樣に人に嫌われては困る)コワイ目付にして貰わうかナア(どうも蛇のようだらうか)ひどひ爪を附て貰わうかナア(夫でも猿の樣では忌だ)どうしても矢張元のまゝで人樣に可愛がられる方が好いと氣が着いて滿足したと云ふ話しですが、人間萬事其の通りで自分の事を思へば隨分立派の所ろがあるから決して人々羨やんでは成りませぬ。然しもし望むならば虎の樣な爪と獅の樣な牙と牛の樣な角と鰐の樣な顎とを巨きな蛇の躰に添へて玆に龍と云う立派な王さまを造る程な心得で居つたらば宜しひ、若し夫だけの覺悟がなくて無暗に人の事を羨やむは面白くない。

廣告

謹而貴孃紳士に告ぐ

弊店儀開業日尙ほ淺きにも關はらず四方の貴孃紳士の御愛顧を蒙り日增に繁榮仕り難有仕合せに存候就ては今後一層廉價と懇切を旨とし益々勉勵仕候間御引立の程偏に奉希候
パリス製美風貴孃、紳士の帽子各種、絹、毛糸製肩掛、ジヨルセース、アムフロイドリー、諸色レース等の上等品澤山見切價を以て買求め候に付此際非常の廉價を以て賣捌き候間何卒不限多少御用向仰付被下度候以上

横濱堺町二十五番地

近江屋榮助

●文明之母●

每月十五日發兌○定價九錢○府外ハ外に郵稅一錢○○見本一錢切手十枚○半年分五十二錢○一年分一圓

諸姉妹御渇望の文明之冊第一號愈去月十五日に發兌ゑなりました目次の重もなるものは左の通り

社說 發行の趣旨
論說 文明の母に欠たるべきものは誰ぞ(中村秋香)家政敎育論(中川重麗)女子敎育論○交際
家政 家屋構造法田村勝貞)
文藝 方丈記講義(太田忠恕)不思議の話(ア、ン生)露二十首(美妙齋主人)
小說 劣夫傑女譚(山縣悌三郎譯)水仙花(鐵兮將軍新作)
批評 論○今世ひめ鑑
雜錄 アルバーチ侯の夫人○婦人服裝討議○日本の女學記者へ○モルモン宗徒
彙報 數件

本誌の價は眞の價で一毛でも減きません御承知下さい

發行所 深川區諸町十三番地 **生文社**

大賣捌 本鄉元富士町二番地 **盛春堂**

忘れました

○○○○○○○○○○○○○○○○本誌には一等金五圓二等金二圓三等本誌一年分の(懸賞題)が載て居ます

少年園

每月二回(三日、十八日)發行、一冊定價金五錢、半年前金五十五錢、一年前金一圓○郵稅一冊金一錢、郵便爲替向け所本鄉郵便局。半年分以上注文の御方には一種の不可思議なる新書を呈すべし

第一號目次　天長節發兌　(壹萬二千部 國文社印刷)

謎探し(セントヘレナ島の景色ナポレオンの幽靈)
發刊の主旨を述べ先づ少年の師父に告ぐ。
少年園
天長節を祝し開園の緒言とす……東海散士
朋友ノ感化……柴四朗
少年園記者に寄す……德富猪一郎
學園
手紙の書方……能勢榮
鸚鵡瑣談……朝比奈知泉
文園
天長節の歌序 幷譜……伊澤修二
The Death of Atsumori……井上十吉
紅葉(小說)……饗庭篁村
譚園
少年園の案內 插畫
大人の幼時 插畫……大森惟中
游學の栞
叢園
面白き事柄數件 插畫數種
芳園
中小學生徒の寄草數篇
懸賞問題二題

東京北豐島郡上駒込村山縣悌三郎邸內 **少年園**

八朔梅 幷ニ 紫薔薇早咲花盛

本所小梅引舟通り請地村 **東花園**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

交詢案内 (乙)

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇はれたき方

七 裁縫 年齢廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族様か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三 教師 栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居様の者に雇はれたし

二〇 裁縫 年齢十四五才にて華族様か或官員方の御方之内へ小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二三 助教 年齢廿二三にして裁縫編物等を教へ小學校などに雇はれたし一部合に依り他の學科をも兼ね得べし但し學校に限らず余暇に督學するとを得ば何づ方にても不苦成る可くは基督信者の方を望む

●喜びのめぐみ

十 教師 乙第二十二號は甲第十號と相談調ひたり

矯風演説會

十一月三日京橋區木挽町二丁目厚生館に於て午後二時開場

靈界の危急存亡　星野光多

飲食物の説附酒と烟艸の害　津田仙

切符一枚五錢。神田巖々堂。銀座十字屋。日吉町警醒社。三十間堀江藤。會場入口にて賣渡す

東京婦人矯風會有志者

小兒科外來診察廣告

小兒科外來患者（十二年未滿ノ者）ハ自今毎月水金の三曜日午前十一時迄ニ來院ノ者ヲ診察治療ス尤モ其病症ニヨリテハ施藥ヲナス

廿一年十一月

醫科大學 第一醫院

發兌

九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一册。五錢	郵税。一錢	（但府内無郵税）	
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）	
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲ぐるものに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる物の廣告は無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B Hiyoshichô, Shinbashi, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新肴町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町燈春堂○同本郷區春木町二丁目所明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋木町石版社○出雲國松江新町偽進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年十一月一日印刷
明治二十一年十一月三日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

東京京橋區日吉町八番地寄留
編輯兼發行者 巖本善治

東京芝區源助町十一番地寄留
印刷者 森田豐

遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢案内（乙）

（催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ）

● 雇はれたき方

七　裁縫　年齡廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三　敎師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても敎授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む

一九　召使　裁縫の敎授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇はれたし

二〇　裁縫　年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之内ヘ小間使に雇はれたし尤も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二三　助敎　年齡廿二三にして裁縫編物等を敎へ小學校などに雇はれたし一部合に依り他の學科をも兼ね得べし但し學校に限らず余暇に督學するとを得ば何づ方にても不苦成る可くは基督信者の方を望む

● 喜びのめぐみ

十　敎師乙第二十二號は甲第十號と相談調ひたり

矯風演說會

十一月三日京橋區木挽町二丁目厚生館に於て午後二時開場

靈界の危急存亡　星野光多

飮食物の說附酒と烟艸の害　津田仙

切符一枚五錢。神田巖々堂。銀座十字屋。日吉町警醒社。三十間堀江藤。會場入口にて賣渡す

東京婦人矯風會有志者

小兒科外來診察廣告

小兒科外來患者（十二年未滿ノ者）ハ自今毎月水金の三曜日午前十一時迄ニ來院ノ者ヲ診察治療ス尤モ其病症ニヨリテハ施藥ヲナス

廿一年十一月

醫科大學　第一醫院

發兌					
九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一冊。五錢　郵税。一錢（但府内無郵税）

十冊。四十八錢郵税。十錢（同前）

半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢

一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記事を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を揭載するに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　金拾錢　前金　（廿七字詰）

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は無代價にて引受く女學に關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B Hiyoshichô, Shinbashi, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○同西久保巴川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新肴町貫明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田春堂○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出堂○京都四條通小橋西へ入集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポスト○大坂備後町四丁目岡島支店○伯耆國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目木村速社○長崎港町○上總國○根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年十一月一日印刷

明治二十一年十一月三日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

遞信省認可